
未返却魔導書と科学のススメ

藤本 天

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未返却魔導書と科学のススメ

【Nコード】

N4107U

【作者名】

藤本 天

【あらすじ】

シオン大陸ザラート王国の学問の街チューリ。チューリ一番の学校、セフィールド学院（通称『学院』）で『学術研究発表会』が開催される。

その上、新学科設立も決まって浮足立つ『学院』。

もちろん、王立学院図書館の『禁制魔導書』達も興味深々。

お祭り騒ぎの中、とある魔導書が貸出期間を過ぎても帰ってこない！！

しかも、借りた魔導師は他人にまた貸ししていた！？

魔導書を探して、ユーリは『学院』を走り回る!!

ハチャメチャファンタジー第二弾!! これより開幕!!

日常という名の序章（前書き）

皆様の励ましメッセージを受けて第二弾、投稿する事が出来ました。
今回のメインステージは王立学院図書館があるセフィールド学術院
です。

どうぞ、お楽しみください。

日常という名の序章

——……さわ、さわ

——……ちちちっ、ぴー、ちちちち

頭上で木々が揺れ、開いていた本の上に葉っぱがひらりと落ちる。

それに誘われるように本を読んでいた主は顔を上げた。

艶やかな濃い藍色の髪、最高級の琥珀のような涼しげな目、雪花石^{アラバス}膏^{タリ}のように白く滑らかな肌、女には無い鋭く伶俐な美貌が日の下に露わになる。

極上の染料を使って染め抜いたかのような爽やかな色の空、優しい色合いの木々。

それを十分に眺めた後、美貌の主は本に目を移す。

青々とした芝生の上に座る彼の傍には分厚い本が積み重なっている。

『天の天蓋』、『四大元素の調和』、『絶対無』、『始まりの叡智』

小難しい題名と本の所々に施された魔導的な文字や円陣からするに、全て魔導書。

小山のように積み重なっている魔導書の隣の彼は随分ラフな格好だが、魔導師だ。

王都で王に仕える宮廷魔導師アヴィリス・ツヴァイネルローウ・スフォルツィアが彼の身分であり、職業である。

しかし、今日の彼は宮廷魔導師のお仕着せである詰襟の制服やコートを纏っていない。

その代わりに彼のシャツの首元にはループ・タイを留める金属の留

め具が付いている。

その金属の留め具は銀製で、己の尾を噛む竜に守られるように五芒星が中心に描かれ、五芒星の上で翼が生えた獅子が吼えるようなデザインを施されている。

魔導師同士の互助組織、〈克蘭〉の組合員が持つエンブレム。

休日に仰々しい宮廷魔導師の徽章をつけ、他人に気を遣わせるのはこちらも肩がこる。

とりあえず、自分が魔導師である事さえ示されば余計な争いごとに巻き込まれずに済む。

というのが彼の考えであり、つまり、今日彼は休日なのである。

だが、いま彼が持ち、熱心に読んでいる本は、彼の身分や小脇に置かれた魔導書に全く関係のない本である。

『よくわかる！！セフィールド学術院・学部案内&学術院入門』

「なに、読んでるの？」

アヴィリスが顔を上げた先にいたのはアヴィリスより年下の少女。シンプルなブラウスにプリーツスカートを纏う体は華奢で小柄。

顔立ちは見苦しくない程度に整ってはいるが、アヴィリスの美しさの前では明らかに霞む、十人並みの容姿。

黒に見えるほど深い栗色の髪を肩先で切りそろえ、新月の夜のように深い色の瞳を丸くしてアヴィリスの開いている本を見下ろす。

「学校案内？何でそんなものわざわざ読んでるの？」

きよとん。と目を丸くする少女にアヴィリスは軽く溜息を吐く。

「ここがどれほど学部が多いか忘れたか？ユーリ」

溜息交じりに声をかけられたユーリは、むっと魔導師を睨む。

「いや、だから。そうじゃなくて、学術院の生徒でもないあんたが、何であたしの学校案内教本を読んでるのかって話なんだけど？」

「興味だ」

「あ、そー」

しれっと言い返されたユーリは溜息を吐いた。

「ところで、ユーリ。お前がここに来たということは、お茶の用意が出来ているのか？」

アヴィリスは言いながら首を巡らせる。

芝生が広がり、野の花がちよこり、ちよこりと顔を出す芝生庭園に亜麻色の布が敷かれ、その上にバスケットとティーポット、ティーカップが乗っている。

それを見たアヴィリスは魔導書や本を両腕に抱え持って、いそいそとそちらに向かう。

「……………毎度毎度思うんだけどね。どうしてあんたがあたしの癒しタイム時間に参加してるのかな？」

「文句があるなら、今日俺が持ってきた茶菓子はいらないな？」
微妙に恨みがましい口調のユーリにアヴィリスはしれっと言い下ろす。

「うっ。王都の三ツ星菓子屋プティ・フィオーレのフルーツケーキを盾に取るなんて、卑怯な!!」

バスケットの中のお皿の上で果実酒をたっぷり染み込ませた乾燥果物^{ドライフル}をこれまたたっぷり生地[↑]に練り込んだ、ずっしりと重いパウンドケーキがコーティングに使われたシロップを艶やかに光らせている。

王都在住の宮廷魔導師であるアヴィリスがいなければ、片田舎のチユーリでは食べられない逸品。

よって。

「アヴィリスさん。今日のお茶はミントとカモミールを入れたハーブティーですよ」

ユーリはお茶をカップに注いでアヴィリスに渡す。

「切り替え早いな、お前」

カップを受け取ったアヴィリスは呆れながら、ハーブティーを口に含む。

「ケーキに罪はありませんから!!」

「お前にはプライドがないな」

堂々と言い切ったユーリにアヴィリスは溜息を吐く。

「プライドでケーキは食べられないでしょーが」

「お前は本当にマルグリット伯爵家の息女なのか？ 意地汚いな」

「どんな立場に落ちようが、落とされようが生き延びて死に際に笑えたら良いっていうのがうちの家訓なの」

意地汚いと言われたのが、さすがに腹が立ったのか、ユーリはツンツと澄ました顔でケーキを頬張る。

「……………何というか、貴族にあるまじきたくましさだな。いや。それ以前に、それがお前の意地汚さにどうつながるんだ？」

「意地汚い、意地汚い失礼な。……………まあ、要は後悔するような生き方はするなっていうこと。……………んゝ！！おいしいゝ！！」

フルーツケーキにうっとりするユーリを見て、アヴィリスはハーブティーをすすする。

「ケーキごとき、食わんでも後悔はせんだろう？」

「いや、このケーキは食べなきゃ損する！！損してた！！ありがとう。アヴィリスさん！！」

「……………喜んでもらえて結構だ」

アヴィリスはきらきら目を輝かせて喜ぶユーリに反論する気が失せた。

皿に盛られて渡されたケーキを一切れ、アヴィリスも頬張る。

「うまいな」

「でしよう！？」

「それに、ハーブティーもよく合うな」

「あ、でもコレだと翠茶もよくない？」

「翠茶？」

「王都によく出る紅茶とは違って、摘んだ茶葉を発酵させずに乾燥だけさせて作ったお茶なの。チューリの特産品。このセフィールド学院の普通科植物学部生徒が茶の木を品種改良させて作ったお茶」

「ほう」

「このハーブティーが無くなったら淹れてあげる。おいしいよ」

白いカップに深い目が覚めるような綺麗な翠色の液体が注がれ、馥郁とした香りを放つ。

その香りと独特の渋みを味わったアヴィリスはほうつと息を吐く。

「しかし、ここの学校は実に多様だな」

辞書のような分厚さの学校案内教本をアヴィリスがめくる。

「まあ、学問の街チューリ一番の学校だからね」

「魔導科や騎士科やらいいとして、普通科の学部は多すぎだろう」

「うん、あ、でも来学期から、普通科から科学部が独立して科学科になるんだよ」

「そうなのか？」

「うん。いまはこの学部までが科学科に入るかの最終調整中だつて」

「ふうん」

「あ、そうだ。この学院の学科と学部の事知りたかったら来週に『学術研究発表会』があるから来てみれば？」

「『学術研究発表会』？」

「通称『学研』って言うんだけど。秋になって、新学期が始まったら、新学科三年生はそれぞれ学部を決めてより専門的に勉強することになるから、学部申請日の一週間前に各々の学科ごとに学部での研究内容とかどういうことを勉強するのかの説明会があるの」

「ほお」

「一般人……は見学できないけど、魔導師だったら魔導科とかの見学なら出来るんじゃないかな」

アヴィリスは無表情のまま学校案内教本を見下ろす。

「お前はどの学部に入るか決めてるのか？」

「……うーん。まだ決めてないけど、……一応文学部希望、かなあ？ 文学部と文化学部のどっちかにしようと思ってるけど……。とりあえず、あたしも『学研』見学してからにしようと思う」

「ふうん。『学研』ねえ」

アヴィリスは翠茶を飲みながら、ぼんやりと空を見上げる。

あの『迷子の魔導書』事件から早三ヶ月。

初夏のさわやかな風を受けてお茶会を楽しむ二人がいるのは、チューリー一番の学校・セフィールド学院通称『学院』の敷地内に立つ

王立学院図書館の最上階。

わずかな者しかその存在を知らず、そこに辿り着く事も出来ない王立学院図書館の植物園に彼らはいた。

1P いま話題の例のアレ (前書き)

王立学院図書館の日常(?) 風景。

1P いま話題の例のアレ

「天文学部、機工学部、物理部、化学学部、生物学部、科学学部が科学科入りに五百ソール」

「それに植物学部をプラスして千ソール」

「うわ、お前。博打打ちだな」

「じゃあ、お前はどうかよ」

「うーん。ここは手堅く、科学、機工、物理、化学、生物の学部が科学科入りに千ソール」

王立学院図書館魔導階、通称『魔導師の溜り場』と呼ばれる談話室で魔導師たちが頭を寄せ合って何やら話し合っている。

「何をしているんだ？ あれは」

魔導書を片手にアヴィリスは首を傾げる。

彼らの話を拾い聞き、そして彼らの手元でちらちらと硬貨の重なり合う音からするに何か賭け事をやっているらしい。

「うん？ あれはな、今度この『学院』に出来る新学科に加入する学部を予想して賭けているんじゃないよ」

アヴィリスの声に応えたのは真っ白な髪によく磨きこまれた古い櫥オーク材のような瞳をもつ年老いた魔導師。

「あなたは……」

アヴィリスの視線を受けた老魔導師は丸い眼鏡越しにすいっとアヴィリスに微笑んだ。

「ロッジ爺さんじゃよ。 忘れたかね？」

「……………いいえ」

首を振ったアヴィリスにロッジ老魔導師はにこりと微笑む。

彼は『魔導師の溜り場』と呼ばれる王立学院図書館魔導師階の談話室で牢名主のように居座っている、常連魔導師だ。

そうなると自然、この王立学院図書館利用初心者の魔導師たちの質問に応える事が多く、『ロッジ爺さん』という愛称ですっかりこの名物老魔導師になっている。

「そもそも、ここの『学院』は普通科というものの定義が恐ろしくいい加減じゃったんじゃよ」

「はあ」

「魔導でもない、医療でもない、美術でもない、士官に必要でもない、そんな学問はとりあえず普通科という事で纏めておったらしい」「と、いうか魔導でも医療でも美術でもない学問をよくあそこまで擁護出来たな」

アヴィリスは多彩すぎるセフィールド学院普通科の学部を思い起こす。

「そこは、ほれ、学問の街チューリらしいところじゃの。誰にも見向きされん学問を専門にする学者達がここに集って相互に助け合いながら、世の中に自分達の学問を広めていった結果が、あのごちゃまぜ普通科じゃ」

「なるほど」

普通科の学部数が恐ろしく多い理由が少しわかった気がする。

学問という学問を擁護する学問の街チューリーの『学院』では学問と認められ、その学問を修めたいと思う生徒が集えば学部を作れる

らしい。

見向きされずにないがしろにされて来た学者達の努力と根気の塊があの『ごちゃまぜ普通科』であるらしい。

「しかし、何故、科学科なんか出来るようになったんだ？」

「何十年も昔にある男がこのセフィールド学術院にやって来て、当時眉唾物とされていた科学という学問を飛躍的に向上させてな。

新しく科学学部や機工学部や物理学部、化学部、生物学、自然科学学部を作りあげ、新技術をぽんぽん生み出して、作りあげた学部に確固たる地位を与えたらしい」

その『科学の父』と呼ばれる男はもう死んでしまったそうだが、その弟子や息子がここで働き、新技術を色々発表したおかげで商館や貴族から支援の申し出が飛躍的に上がり、セフィールド学術院の理事たちがとうとう重い腰を上げ、新学科増設に至ったらしい。

「まあ、あとは科学なんぞにのめり込む学者は魔導師に負けず劣らずの奇人・変人ぶりらしくてな。実験のたびに他の学部の教室にまで被害が及ぶと苦情が多数発生するそうだな、『危ない物は纏めて別の場所に押し込んだけ』と理事たちも考えたそうじゃ」

「……」

アヴィリスは微妙な顔で口を引き結ぶ。何となく、後者の理屈のほうに正しい気がするのになぜだろう？

「魔導師に負けず劣らずの、奇人……」

窓の外から何かの建物を建設している現場が見えた。

おそらく、あそこが奇人・変人ぞろいの科学科の校舎になるのだらう。

ちよつと、見てみたい気がする。魔導師並みの奇人・変人が研究する『科学』というものを。

「『学研』か」

ぽつり、と呟いたアヴィリスにロッジはくすりと微笑む。

「行ってみたいか？」

「行けるのか？」

問い返すとロッジは老獪な笑みを浮かべた。

「入ってしまったばこつちのもの。特に入場制限がされているわけではないからの」

王立学院図書館魔導階の牢名主もとい大常連のロッジ爺さんはセフイールド学術院の行事にも詳しいらしい。

アヴィリスはくすくす笑うロッジ爺さんの手招きに応じる。

未知の知識は蜜の味。

そして、蜜をたっぷり含む花には棘がある事に人は気づかない。

魔導階での噂話は魔導書を通じて『一級魔導書』階『一級危険魔導書』階に伝わり、そして、『禁制魔導書』達に伝わる。

それは、まるで木の根が吸い上げた水が、木の幹を木の葉を潤すさまに似ている。

近頃の『禁制魔導書』達の話題はもっぱら新設される科学科について。

海千山千、酸いも甘いも見知って来た魔導書にとって、面白い娯楽だ。

<とうとう、科学科が新設される事になったんだねえ>

<そりゃあ、^{スポンサー}支援者が多額の寄付をしたからなあ>

<それに、あそこの活躍は近頃めまぐるしい>

<魔導の様に才と魔力がなくとも使える技術じゃからな。需要も多
かろう>

ざわざわと騒ぐ魔導書達をユーリはいつもの定位置で聞いていた。

<しかし、そうなると魔導科の者たちは面白くなかろうなあ>

<ああ、聞いたぞ>

<魔導科の教授陣は随分不満らしいね>

<そりゃあ、支援者の取り合いになるからだろう>

<魔導科に支援していた商館がいくつか科学科に乗り換えたらしい
しねえ>

<そのせいで魔導科の占術学部の予算が削られるとヴォルヴァ助教
授が嘆いていたな>

ユーリの脳裏に神経質そうどこか儚げな女魔導師の姿が浮かぶ。

モイラ・セロスⅡノルン・ヴィ・ヴォルヴァ。

いつもヴェール越しでしか人と接触しない変わった教師だと有名な
女性。

図書館で何度か出会った事があるが、ヴェール越しの姿といい、ど
こか夢見がちな喋り方といい、神秘的さより不審さが目立つ女性だ
ったと思う。

＜的中率に個人差がある占術学より、普通科の自然科学部の天気予想のほうが当たって地元農家では有名だぞ＞

＜占術学部の天気予想料は高いしねえ＞

＜ありゃあ、ぼったくりだろう＞

＜ヴォルヴァも占術魔導師としては二流もいいところだし＞

＜自然科学部の天気予想はその点、安いから外れても腹は立たんしな＞

＜くくっ、今頃ヴォルヴァが『わたくしの神聖な占術学よりこんな俗な学問を取り上げるなんて、信じられせんわッ!!』って言うているのが目に浮かぶ!!＞

＜当てる事も出来ないくせによくもまあ＞

＜あいつ、外では神秘的っぽくヴェール被ってるけど、あのヴェール一枚千ソールの安物だぞ＞

＜そうそう、いつもはおつまみと安い麦酒と葡萄酒片手に漫画雑誌読んで笑ってるような奴だし＞

＜雑誌の恋占いマジで読み込んでたしなあ＞

＜あ、婚期相当気にしてて、恋愛運が上がるとかいう石ころ買った＞

「それって半年くらい前に普通科では流行った、うっさんくさいアレ？」

半年くらい前、『恋が叶うペンダント』とかいう半世紀前から使い古されている手口の胡散臭い恋愛グッズが普通科で流行った。ピンクの石もチェーンもハートマークのペンダントで、セリーズやマイが持っているのを見て、軽く引いた覚えがある。

<うわあ>

ユーリが『恋が叶うペンダント』のデザインを伝えたと、魔導書達が一様にドン引いた。

<そこまで追い詰められていることを哀れむべきか？>

<いや、自分の星命せいめいを読み解けんような占術魔導師など占術魔導師ではないわ>

怒りを顕にするのは占術魔導系の魔導書たちだ。

一流の魔導師から作られた魔導書たる彼らに妥協はない。特に己に記された魔導を学ぶ魔導師には手厳しい。

<だが、仮にも占術魔導を修めているながら、市販の占いに頼る不甲斐なさは哀れむべきではないか？>

<魔導師としても、女としても崖っぷちっという事だろうな>

<前回の魔導学会の評価が低かったらしいしなあ>

「あんた達。いつも、ものっすごい失礼だね。魔導師に対して」

他の魔導書たちは何となく人事のようで、いまいち面白みのないヴォルヴァの話題に飽きてきたようだ。

魔導階の魔導師たちと同じく、どの学部が科学科に入るか、議論し

ている。

<やっぱり、科学学部、化学学部と自然科学部と機工学部は科学科入りだろう>

<物理と生物、植物学部はどうだ？>

<生物学部を医療科に移す話はどうなった？>

<あれは、半年前にポシャッタだろう。 奴らの研究は医療転用が目的なだけではないからな>

<物理学部は科学科入りだろう。化学学部と物理学部の教授陣が結託しているらしいからな>

<何で？>

<物理学部は化学学部と結託して金持ちの支援者を抱き込んでるらしいぞ>

「うわぁ……」

思わずユーリは一步下がる。

知らない方が良かった学内裏事情の予期せぬ大暴露に身が縮む。

<しかし、何をとち狂ったか、アレを慕う学生がいるのは驚きだな>

一方、占術魔導系の魔導書達は引き続きヴォルヴァ助教授の事をネタに話しこんでいるようだ。

<自分の能力に先が見えだしてたような奴らだな>

<授業についていけずに、絶望し始めた奴らとかな>

「それって、なんか犯罪の匂いがするんだけど……」

＜自信を無くした奴らにヴォルヴァがいう事は『わたくしと共に星の神秘を知りなさい。さすれば、あなたの運命も開けます』だ＞

（胡散臭っ）

エセ宗教の教祖の言葉の様だ。

これで金を巻き上げていたら、立派な靈感商法だ。

そして、ユーリの嫌な予感はある中しした。

＜馬鹿高い白筆の魔導書を何人かの生徒に買わせていたのを聞いた事がある＞

＜俺は一個五百ソールのホロスコープの占星盤を五千ソールで生徒に売っていたと……＞

「それ、本当に悪徳商法じゃん！！ ああ先生ダメなだけじゃなくて犯罪者じゃんか！！」

＜植物学部は科学科に入るために教授陣に金色のお菓子を渡して回ってるって聞いた事が……＞

「こっちは賄賂！？」

＜それがどうした。魔導科の錬金学部の奴らはたまにこっそり金の合成をしてるらしいぞ？＞

「金の偽造も犯罪です！！ てゆーか！！ うちの学校の先生達は何してんの！？ 犯罪に足突っ込んで純粋な生徒に何を教えてるわけ！？」

＜何を言う、禁忌を恐れていたら魔導なんぞやっていけんぞ＞

＜科学なんて眉唾物とされていた学問を研究し続けて来た人間に、まともな思考を求めるのが間違ってるんじゃないか？＞

「せ、正論っぽく聞こえるけど。あんた達の言う事が正しいなら、先生方がやってる事しよばいから！！ 全員死ぬほど俗っぽい事のために自分達の研究悪用してるから！！」

＜自分が研究した事を自分のために使わなかったら何に使うんだ？＞

「『魔導は万物のために在る』、『科学は大衆のために在れ』っていうありがたあいお言葉をお忘れですか！？」

＜それはそれ、これはこれっていうか。……俺を作った魔導師は幻術でツケをチャラにしていたし＞

＜ワシを作った魔導師は借金踏み倒すためにワシを作ったぞ？＞

「俗っぽ！！ つーか、あんたらのご主人様犯罪者じゃん！！」

＜どんな立派な研究も金次第ってことだ＞

「あんた達、一応一流のそれも歴史に名を残すほど偉大な魔導師に作られた魔導書なんだよね！？ そんな魔導書が作られた理由が金！？ 地位とか名声とかカッコイイ理由じゃないわけ！？」

＜地位と名声で腹は膨れんだろう＞

「いや、まあ。そうなんだけど……」

一応爵位はあるが貧乏で、ここでバイトをしているユーリに反論の

しようがない。

ファンタジー

しかし、非現実的な存在の『禁制魔導書』達から現実的な金銭事情を論されるのは、微妙に納得がいかない。……気がする。

ととにかく、今頃学院本部は大荒れだと思うぞ>

<新学科設立、という事は予算の分配率が大きく変わるからな>
<予算を削られまいとどの学科も学部も必死だろうよ>

ワイワイ騒ぐ魔導書達の声を聞きながら、ユーリは王立学院図書館の北、セフィールド学院の正門に入ってすぐにあるセフィールド学院本部を見やる。

セフィールド学院の学び舎を守るように立ちはだかる城壁のような『学院』本部校舎の大ホールでは今頃、理事や各学科・学部の教授陣の論議が紛糾しているのだろう。

(何も起こらなければいいんだけど……)

1P いま話題の例のアレ（後書き）

一応、王立学院図書館内での賭博行為は禁止ですが、近頃司書達が目がゆるいので魔導師たちは博打を打ちまくりです。

博打打ってる魔導師達も実力ある魔導師のはずなのですが……。

2P 妥協を覚えて人は大人になる

「わたくしの神聖かつ高尚な占術魔導学が低俗な科学などに劣ると貴方^{あなた}方はおっしゃるといふの!？」

甲高いヒステリックな声がすり鉢状にイスと机が並ぶ、会議場に響き渡る。

ここはセフィールド学術院の本部である、『学院本部』校舎の大会議場。

セフィールド学術院の唯一の出入り口たる大正門からすぐに見えるのがこの建物であり、セフィールド学術院の運営と発展を司る、セフィールド学術院の“要”たる建物である。

『学院本部』校舎の一番大きな大会議場にいま、セフィールド学術院の理事・教授が全員勢ぞろいしていた。

すり鉢状になっている議場を見回し、窮屈そうに溜息をつく金髪の美女が一人。

(ほおんど、暑苦しい事……)

エリアーゼはエメラルドのような瞳を伏せた。

理事・教授が全員勢ぞろいする事はほとんど無いが、新学科設立となれば話が違う。

そのため、『王立学院図書館管理責任者』としてエリアーゼもこの大会議場の末席にいた。

今日の議題は『科学科の設立にあたって、科学科に加入する学部 of 調整と予算分配について』。

議場は始めから大荒れ模様だったが、魔導科占術魔導学部 of ヴォル

ヴァ助教教授の発言でさらに状況は悪化した。

「貴殿！！ 我らの研究を侮辱するつもりか！！」

「貴女のその発言はセフィールド学術院の『全ての学問を受け入れ、万人に平等に知識を与える』という理念に反する！！」

「学問に高尚も低俗もないはず！！」

「今すぐ撤回と謝罪を求めろ！！」

轟轟と批難の声を上げたのは科学科への加入が決まった学部教授陣。

白い白衣の集団に迎え撃つのは魔導科の魔導師たちだ。

「しかし、貴方方の学問のせいで我々の研究が妨げられるのはこちらも本意ではない」

「ヴォルヴァの発言は確かに問題だったが、我らの学問の高尚性はそちらも知っているはず」

「謝罪の必要はないと思うがな」

「それは、我々の学問に膝を屈するような成果しか出せない貴殿らの『負け犬の遠吠え』と考えさせてもらっていいか？」

「高尚？ はっ！！ 笑わせる。魔力が無い万人に伝える事の出来ない学問を誰が学ぶ！？」

「間違いを認められない者は愚者にも劣る！！」

「貴様ら！！ 我々を侮辱するか！！」

「魔導の深淵を知らぬ凡人に我らの学問を知る知能もないようだな」
「貴方方の学問こそ、この『学院』には不要だ！！」

「何を！！」

「そちらこそ、何を言う！！」

（ああ、五月蠅い……）

白衣の科学科の教授陣と魔導科の教授陣が総立ちで轟轟と自分の学問の正当性を語り、相手の学問を詰る。

真面目な言葉を使うと堅苦しいが、簡単にいえば子供の口喧嘩と大差ない。

エリアーゼは自分の息子が学院内の託児所で、お友達と自分のおもちゃの自慢合戦をしていた姿を思い出す。

（お願いですから、お前の母ちゃんでーべーそーとか言わないで下さいね？ 貴方方の精神年齢を疑ってしまいます）

それを危惧したくなるくらい彼らの論争はどんどんレベルが低下していく。

聞いている理事や他の教授達がげんなりし始めたころ、

「静粛に！！ 両陣！！ それ以上口論をするならば出て行きなさい！！！」

すり鉢の一番奥から張りのある鋭い女性の声が響く。

真っ白な白髪を緩やかに結いあげ、深い海のように青い瞳を持つ五十歳ほどの貴婦人がピンツと背を伸ばして立ち上がり、科学科と魔導科の教授達を睨みつけていた。

「ソフィア学院長」

両陣の誰かが眦を吊りあげる老貴婦人をそう呼んだ。

「魔導科教授長、科学科教授長」

老貴婦人は真っ直ぐな目で各学科の長を呼ぶ。

「この口論が貴方方の学科に有益なものでしたか？ 私は貴方方が貴方達の学問をより発展させるにふさわしい人物であると思い、貴方達を『教授長』に任命したのですよ？」

おごそかな老貴婦人の言葉に、両陣の長達は恥いったように身を竦ませる。

「わかったのなら、席に着きなさい。ヴォルヴァ助教授の発言の責任は魔導科教授長のドレイツ教授に任せます」

「わたくしは!!!」

「黙りなさい!!! どんな学問にも貴賤はありません!!! それかわからないのなら……」

ソフィアの脅すような視線を受けたヴォルヴァは唇を引き結んで渋々席に着く。

大人しく両陣の教授達が着席した事を見計らい、ソフィアはすつと三つ揃いの貴族の礼服装姿の壮年の男性を見やる。

「議長。議題の進行をお願いします」

「は、はい!!!」

(やっと話が進みそうですね)

そう思ったのもつかの間、

「では、この予算案の通り魔導科の予算を10%カット……」

「いや!!! 納得いかん!!!」

「我々から削られた予算を科学科なんぞに使われてたまるか!!!」
魔導科の教授陣が立ち上がり、

「なんだと!?!」

「予算を削られてしまうのは、貴様らの怠惰が原因だろう!!!」
科学科がいつせいに迎え撃った。

ぎゃいぎゃい、わいわいといつまでたっても進行しない議題と状況

にエリアーゼは溜息をつく。

そして、ずっと学院長の席を見、耳をふさぐ。

「いい加減にしなさあああああいい!!」

般若のような形相のソフィア学院長が『学院』中に響き渡るような声を吐き出した。

「まったく!! どの時もこいつも!!」

「まあまあ。学院長、気を落ちつけてください」

鼻息も荒く執務机に腰かけたソフィア学院長をエリアーゼはいつもの微笑みでなだめる。

一向に進まない議論に、堪忍袋の緒が切れたソフィア学院長の提案で予算案と科学科加入学部調整は理事たちの協議の後、最終決定時に教授達に意見を求め、明確な理由の下での異議申し立てのみをもう一度話し合う事になった。

「まあ、今回の件で理事たちも教授達だけで話し合いをさせるのは無駄と知ったようですし、最終的に教授達も学院長の提案を承諾したわけですし」

「承諾したのは理事たちと騎士科・医療科・芸術科と普通科の教授達よ」

多数決の結果を思い出したのか、エリアーゼが淹れた紅茶をソフィアは苦々しげに口に含む。

応接用のソファに腰掛けることを勧められたエリアーゼも静かに茶をすすめる。

「みんないい年して自分の我を通す事しか考えてないんだから!!」
鼻息も荒くソフィアが吐き捨てる。

「ですが、それだけ教授方は妥協せずに自分の学問を修め、高めて来たという事でしょう？」

エリアーゼが諭す言葉にソフィアはケツとそっぽを向いた。

「そうね。我を貫き通す子供がそのままデカくなったような奴らだものね」

口論の最中、彼らの言葉のレベルがどんどん低下していった事を皮肉っているのだろう。

ソフィアはげんなりした顔をふってエリアーゼに向き直る。

「あの人たちの事はもういいわ。それより、図書館はどう？」

「はい。工事のほうももう終わりましたし、副館長にクライヴ司書の採用を支持していただいたおかげでわたしの苦労も減りましたわあ」

につこりと微笑んだエリアーゼからソフィアは少し視線を逸らす。

「レイヴン副館長の事は、御免なさい。こちらの配慮が足りなかったわ」

「いいえええ。あの件のおかげで、無能な理事も一掃できましたしい」

「……………そうね」

にこにこ微笑むエリアーゼを前にソフィアも負けじと微笑む。

三ヶ月前の王立学院図書館での魔導書の暴走・放火事件は世間に大々的に報じられた。

ただの図書館ならば市民の反感も薄かったかもしれないが、ザラー

ト王国の管理下にある『王立』の図書館を傷つけたとして、主犯の魔導師二人と同じく共犯者の司書と副館長も槍玉に挙げられた。

特に副館長であったレイヴンは王立学院図書館の管理者の補佐という立場でありながら事件に加担したとして市民の猛烈な非難を浴びる事になった。

調べてみると、当時のエリアーゼの王都行きもレイヴンと、彼と手を組んだ理事たちによって仕組まれたものであるという事がわかり、副館長にレイヴンを押した理事、加担した理事達も一掃される事になった。

（図書館の管理人にしておくにはもったいない女狐だこと）

事の発端は事件を起こした奴らだろうが、後に起こった『大掃除』に暗躍したのはエリアーゼであることくらいソフィアも気づいている。

それに、エリアーゼのしようとした事に少々加担した自覚はある。

「大事なならそれでいいの。 あそこはこの国の……いいえ、世界の宝ですもの」

「はい。心得ています」

こくりと頷いたエリアーゼにソフィアはようやくほっとした笑みを浮かべた。

「科学系の専門書の増加は進んでいるかしら？」

「ええ、いま急ピッチで最終調整中ですわ」

「そう」とソフィアはそっけなく言い、エリアーゼが差し出した書類に目を通す。

「今回の『学研』荒れるでしょうねえ」

「そうね」

エリアーゼがぼつりとつぶやいた言葉に、ソフィアは溜息と共に理事達と決めた取り決めを思い出す。

『『学研』での研究発表内容を審議し、その後に行われる学部申請で加入学生が多かった学部へ予算を優先的に配慮する』

「『学研』で何かが起これば即生徒の身に危険が及びます」

「魔導科と科学科がお互いに何か仕掛けなければいいですけど……」

「ええ、ですから、騎士科の教授とこれから会合です」

心底辟易した様子でソフィア学院長は溜息をつき、エリアーゼに書類を返す。

書類の確認をしたエリアーゼはすつと背筋を伸ばした。

「では、わたしは失礼させていただきます」

「ええ、これからも図書館をよろしく」

「エリアーゼ殿」

学院長室を出たエリアーゼは呼び止められて振り向く。

「まあ、オストロ教授」

エリアーゼの視線の先に鶯色の瞳と髪を持つ、厳しい顔立ちの男性が立っていた。

白いクラヴァットに明るい栗色の三つ揃いの礼服を纏う様は典型的な貴族の成り立ち。

「学院長は中にいるか？」

貴族らしい尊大な口調にエリアーゼはにこりと愛想笑いを零す。

「ええ、オストロ教授はどうしてここに？　これから学院長は騎士科の教授とお話があるそうですね？」

「何故、だと？」

オストロ教授――アルカス・カリストリアルス・オル・オストロは異様な事を聞いたかのようにエリアーゼを見下ろす。

「貴殿は魔導科が侮辱されたというのに何も思わないのか？」

「……」

彼もまた、魔導崇拜思想の持ち主だ。

大会議場での一件が気に食わなくて抗議に来たのだろう。

「申し訳ありません。わたしは一介の図書館の管理人ですから、教授方の崇高な議論には口を出せませんわあ」

にっこりと微笑んだエリアーゼ。

ユーリが見たら『イラッとしてる！！』と震えあがるような笑顔だった。オストロはふんつと鼻を鳴らしてエリアーゼを見下ろす。エリアーゼは優雅に一礼するとオストロが学院長室の扉を叩く音を背中に聞きながら、その場を去る。

『学院本部』から出たエリアーゼは『学院本部』の中庭側に置かれた掲示板を見た。

掲示板には、各学科の『学研』案内が貼られている。

セフィールド学院の生徒達が一生懸命学んだ事学んでいる事を伝え、知ってもらい、共に学ぶ仲間を増やす為に行われるのが『学研』だ。

（大人達の下らない自尊心のためではないでしょうに）

ソフィア学院長は『学研』を予算分配のための篩ふるいがわりに使われる事が気に入らない。

エリアーゼは母として、一個の人間として、若者の伸びやかな芽が大人の事情で踏みにじられるのは我慢ならない。

（どうか、無事に……）

楽しそうに『学研』の発表内容を話し合う生徒達の横を歩きながらエリアーゼはそっと祈った。

3P 図書館司書達の苦闘

高い天井にざわざわと話し声が反響する。

だだっ広い倉庫のような部屋の中、ぽつりぽつりと小島のように等間隔に机といすが配置されている。

その小島の間を縫う様に配送用のカートを本でいっぱいにした司書達が走り回っていた。

司書達が慌ただしく働く中、ぽつりと浮かぶ小島のひとつにユーリもいた。

「タイトル題名『重力と物質の移動』著者サー・フィニア・アイザック」

「はい、チェック。専門階二階の7番書架のSの4」

ユーリが読み上げた本の題名をオリアナが紙に書き記す。

ユーリは読み上げた本を『専門階二階7番書架・S4』と書かれた棚に入れた。

オリアナが作業する机の側には木で出来た箱があり、その中には本がびっしり詰まっている。

その箱からユーリは本を取り出す。

「題名『天動説の矛盾・地動説の概念』 著者ニコラス・コペルニクス」

「はい。チェック 専門階三階の5番書架のE8」

オリアナの指示を受けてユーリは題名を読み上げた本を『専門階三階5番書架のE8』と書かれた棚に入れる。

ここは専門階のバックヤード。専門階の中で最も広い、通称『赤煉瓦の広間』。

昔々は壁一面が美しい赤煉瓦に覆われていたらしいが、今では本棚に埋もれて昔の姿は想像できない。

そして、昔々は専門階で最も広い部屋と言われていたが、いまは部屋の中を走り回る司書達のせいで少し手狭に見える。

「シーズ!! とりあえず専門階一階の一番にこの棚の本持っていないって!!」

「これは専門階二階の本だって言っただろうが!! ネロ!!」

「すいません!! ロランさん!!」

「専門階三階の4番書架に行ける奴いる!？」

「ロゼの補佐、にマリー!! 行ってくれ!!」

「ナサリー!! この棚の本専門階三階の6番書架に持って行ってくれ!!」

部屋の中は埃除けの紺のエプロンを纏い、トランシーバー片手に配送カートを押して動き回る司書達で活気づいている。

と、いうより、みんな少々ヤケクソ気味だ。

今現在、『赤煉瓦の広間』で司書達が行っているのは図書の貸し出し準備。

貸し出し準備を受けている図書は科学系の図書ばかり。

セフィールド学術院の新学科設立と共に、セフィールド学術院内にある王立学院図書館では新しい学科のために図書の補充を行う事になった。

その計画は半年前から行われていたはずなのだが……。

「くっそ、あのダメ眼鏡!! 仕事すらしていなかったのかよ!!」
ロランが額から流れる汗をぬぐう。

「やめて、ロラン!! やる気が失せるでしょう!？」

ロランの声を聞いたキーリスがペンを握り潰さんばかりに叫ぶ。

だが、皆言いたい事はロランと同じらしい。

半年前から計画的に行われていたはずの図書の補充は三ヶ月前に免職処分になったレイヴンの怠慢で一向に進んでいなかった。

と、いうより、レイヴンが担当するはずの仕事のみが一向に進んでおらず、そのしわ寄せがこうして司書達に襲いかかっている。

「ギズーノンさんとクライヴさんも死にそうな顔で仕事してましたし……」

新しく副館長になったのは、クライヴ・リーゾ・セロ・リユネットという生真面目な学者風の青年。

いままではギズーノンの補佐をしながら専門階の管理責任者をしていた人だ。

『赤煉瓦の広間』の隣にある『鴉の部屋』と呼ばれる専門階の管理室は立ち入り禁止状態になっている。

理由は、その部屋で働いているギズーノンとクライヴが悪鬼になっているから。

うっかり入室したら最後、八つ当たりにな何をさせられるかわからない。

特に、クライヴはここ三ヶ月ともに家に帰っていないというから恐ろしい。

ここに集められた司書達もここ二ヶ月間残業続きで、かなりフラストレーションが溜まっている。

「俺、いい加減に休み貰わないと彼女に振られる」

「いいじゃない、彼女くらいまた作れば。あたしなんか近頃帰りが遅いせいで同居中のお義母さんに白い目で見られるわ、息子には泣かれるわ」

「今日は早上がりしていいわよ、サーリ」

ぎりぎりペンを締め上げて嘆く褐色の肌の女性をリリースが慰める。

『学院』に通う子供を三人も持つ母であるリリースは既婚女性の苦しみを誰よりもわかつているのだろう。

「この前、子供に『お母さんはわたしより本が大事なの?』って聞かれちゃった……」

「『お母さんのシチューが食べたい』って言われた……」

同じく既婚女性司書が集まって愚痴がぼつり、ぼつりとこぼれる。

「俺も子供に顔を忘れられそうだ」

「お前んち、ガキ生まれたばっかだっけ?」

「俺が家に帰るともう子供は寝てるんだよ」

「切ないな。お父さんは」

男性司書も色々あるらしい。

「切なかうと、家庭内不和が起ころうと、今日のノルマは終わらせて下さい……」

司書達の愚痴に細い声が割って入る。

声の主は片眼鏡モノクルをかけた、ひよろりとした細長い青年。

「クライヴ……」

ロランが引き攣った顔でよろよろと『赤煉瓦の広間』に入ってきた青年を見る。

顔は不健康な感じに痩せこけ、いつもはきちんと整えられている麦藁色の髪はぼさぼさ、シャツもズボンもよれよれで、体中に悪雲を纏わりつかせている。

生真面目な学者風の印象があり、いつも清潔な感じのクライヴの変わりようにユーリも息を飲む。

「次に配送される図書で補充は終わりますから……」

ふふふふ……と低く笑う姿は墓場から起き出したばかりの吸血鬼の
様だ。

「ぎ、ギズーノン爺さんはどうした？」

「ああ、さすがに、あのお年でこの過密スケジュールはきつかった
ようで、いま隣の部屋で休んでもらっています……」

「誰か！！ 『鴉の部屋』 に行ってくれ！！ ギズーノン爺さんを
医療科併設の病院に！！」

ロランがトランシーバーに向かって怒鳴る。

おそらく、ギズーノンは『鴉の部屋』で倒れているのだろう。

「ギズーノンさん！！」

「行かないで下さいね？」

思わず駆け出しかけた司書達の前にクライヴがゾンビの様にたちふ
さがる。

「ギズーノンさんは応援の司書達に任せましょう。 それよりも、
仕事を完遂させてください」

そう、とクライヴは『鴉の部屋』のほうを見て言う。

「ギズーノンさんの尊い犠牲を無駄にしないためにも……」

「不吉な言い方すんな！！」

応援の司書達からの報告を受けたロランが思わず吼える。

ギズーノンは確かに『鴉の部屋』で倒れていたため、一応病院に連
れて行くが、命に別状はないらしい。

「クライヴさん。 ところで、次に配送されてくる図書は何部ある

の？」

ロランの報告にほっとしていたユーリはオリアナの言葉でハッと現実に戻される。

司書達の悲壮な視線を受けたクライヴはふっと微笑む。

「あと、二十万部です」

「にじゅっ!？」

まだまだ、まだまだ、まだまだ残っている貸し出し準備中の図書があるのに、さらにあと二十万部も増えるというのか。

傷がつかないように防護処理して、“紋”を押して、題名を登録・記録して、レファレンス用の資料を作って、棚に陳列する。

工程としては単純だが、七面倒臭いこれらの作業をしないといけない図書がまだまだまだ残っているのに、またプラス二十万部。

「ガイ、悪い。彼女に振られてくれ」

ぽんっとロランが「彼女に振られる」発言をした司書の肩を叩く。

「人事だと思って!！」

ガイと呼ばれた青年はロランの腕を払ってきいっと叫ぶ。

「まあまあ、いまから僕もこちらの仕事を手伝いますから……」

「あの、クライヴさんも病院行って欲しいんですけど……」

「ゾンビが動いてるみたいで、怖いぞ。お前」

ふふふり、そうですかあ?と微笑むクライヴにキーリスとロランが溜息をつく。

その様子を見た司書達は、諦め顔で仕事を始めた。

さぼっていたら、何だかクライヴに呪われそうで怖くなったのが本音だ。

「ユーリ、この棚の本を専門階二階の7番書架に持って行って」
「はい」

ユーリは配送用のカートに図書を詰めて『赤煉瓦の広間』を横切る。
『赤煉瓦の広間』の唯一赤煉瓦が見える場所には『専門階一階』・
『専門階二階』・『専門階三階』・『専門階四階』と書かれたプレートが作りつけられている。

ユーリは『専門階二階』と書かれたプレートを外し、煉瓦と煉瓦の間の継ぎ目に差し込む。

継ぎ目に吸い込まれていくプレーと共にユーリも配送用のカートを押しながら煉瓦の中に入っていく。

巨大な木々で出来た森の様に乱立する巨大な本棚と木々に絡みつき合う蔦の様に本棚と本棚を繋ぐ渡り廊下が印象的な専門階の光景がユーリを出迎える。

いつもと違うのは専門階を利用する市民の姿が見えない事。

専門階は今回の図書の補充を機に『特別調整期間』として市民の立ち入りを禁止している。

通常業務と図書の補充を同時進行出来ないと判断したクライヴがエリアーゼ館長に嘆願して実現した専門階のみの休館措置だが、その休館措置の期限は明後日まで。

（絶対終わらないし……）

配送カートを押しながら、ユーリはがっくりとうなだれる。

本来は魔導階で働いている予定だったユーリがいきなり専門階に緊急収集された時点で嫌な予感はしていたのだが、ここまで切羽詰まっているとは思いつかなかった。

（魔導階は大丈夫かなあ……）

魔導階で働く主要メンバーも専門階に来ているため、多分、魔導階

に戻ったら業務がてんこ盛りになっているだろう。

(う、帰りたくなってきた……)

しかし、この専門階の仕事もいい加減疲れてきた。

早いところ終わらせて通常業務に戻りたいのも本音だし、それに何より、魔導階の風紀の乱れが心配だ。

魔導階に不慣れな司書達が入ってこ舞いで働いていれば、自然魔導師達への監視は甘くなる。

知識に貪欲なのはわかるが、王立学院図書館の魔導を調べるために、わざと壁際の『四の魔導書』を開いて隠し部屋に行こうする魔導師達を止めるのも司書の仕事だし、それを肴に賭博行為を行う魔導師達を諫めるのも司書の仕事。

(つて!! 魔導師ってまともな事する人いないのっ!?)

『禁制魔導書』を作った魔導師といい、この魔導師達といい、魔導師と名のつく者達はロクな事をしていない気がする。

「うう、まともな魔導師って、どこにいるのかなあ」

はあ、と深刻な溜息をついたユーリは黙々と本を本棚に移す。魔導階で厄介な事が起きていない事を祈りつつ。

年若い魔導師が魔導階のカウンターで魔導書の返却を行っている。

「はい、これ」

「あ、はい。返却の魔導書ですね」

「あ、あと、予約した魔導書って帰って来てる?」

「はい。少々お待ち下さい……」

それを受け取った女性司書はカウンターに魔導書を置き、確認作業のために立ち上がる。

「おい、検索を頼んだ魔導書はどうなっている? いつまで待たせ

るつもりだ!？」

そこに、もう一人の魔導師がやって来た。

「は、はい!! すいません!!」

威圧感のある魔導師に魔導階での業務に慣れていない女性司書はすくみ上がる。

おびえて慌ただしく動き回る女性司書を見て、年若い魔導師は気の毒そうに見やると、そうっとカウンターから離れる。

「あ、俺。 あっちの談話室で待ってるから」

「はい。 すいません。 ショワナール魔導師!!」

司書は年若い魔導師を見送って慌ただしくカウンターから離れる。イライラとした様子でカウンターにいる魔導師が怖かったからだろう、せかせかと走る姿は逃げるよう。

それを見送った魔導師は、ふと、カウンターに残っている魔導書を見つけた。

カウンターには誰もいない。

誰も、カウンターを見ていない。

ユーリの願いは、残念ながら誰にも何にも届かなかった。災いの種が、ぱかりと芽を出した。

4P **ガール・ミーツ・ガール**（前書き）

図書館司書の戦いとガールズトーク（？）です。

4Pガール・ミーツ・ガール

その日、専門階は異様なほど人が集まっていた。

「えーと、科学学部の方ランシウムさん。『物質の燃焼変化論』と『熱力学法則論』」

「化学部のルーベンさん。『結晶構造学』と『物質の状況変化による性質変化について』」

「物理学部のマルコムさん。『力学基礎概論』」

「自然科学部のクリスティーナさん『気象変化の科学』」

専門階のカウンターには科学科に加入予定の学部の生徒や教授が集まっていた。

リリースの話によると図書館開館二時間前から長蛇の列が出来ていたらしい。

彼らの目当てはもちろん、司書達が残業し続けて貸し出し準備をした科学系の専門図書。

皆、自分の目当ての図書のリストを作ってカウンターで検索を頼んでいる。

ユーリも司書の一人として専門階にいた。

今日はヘルプで入ったのではなく、ただ単に専門階で働く日だったのだが、働き始めて一時間、誰かに代わってもらえば良かったと早くも後悔し始めていた。

ランシーバーからはひっきりなしに検索図書の名前があげられる。貸出上限ぎりぎりまで本を借りていく利用者ばかりなので、ユーリは配送用のカートを片手に専門階の歩くだけで足が震えそうな渡り廊下を足早に進む。

「キーリスさん。ネルソン教授の図書持ってきました!!」

「ありがと!! 次、このリストの図書の検索よろしく!!」

バックヤードを通過して専門階一階の中央カウンターについたユーリは、最初より長くなった列に眩暈を覚える。

時間の経過と共に列は長くなっている気がする。

司書に探してもらった方が安全だし、早いし、無駄がないが、ここまで待機している人を見ると「自分で探してくれ」と言いたくもなってくる。

キーリスに渡されたリストを読み上げたユーリは溜息をつく。

「この『分子構造論』と『科学の父の遺産』はもう貸し出しされます」

「嘘だらっ!?! 俺、開館三時間前に並んだのに!!」

その声が聞こえたらしい、金髪の少年が勝気そうな榛の目を見開いて嘆いた。

「借りたのはロレンス教授みたいね。とりあえず、貸し出し予約しておきますか？」

キーリスが問うと、その少年は項垂れながらもこくりと頷いた。時間の経過とともにめばしい本はどんどん借り出されてしまい、返却されてくるのを指をくわえて待たないといけなくなる。

しょんぼりと予約申請書にサインする少年を見、ユーリはキーリスに向き直る。

「リストに残っている三つの本はまだ貸し出しされていないから、取ってきます」

「あ、ユーリ。ついでにこのリストもよろしく!!」

「はあい!!」

別の司書から渡されたリストも追加して、ユーリはやケクソ気味にカートを押した。

「あ、おい!! 待ってくれ!!」

専門階の二階の廊下を足早に進むユーリの背に高い声がかかった。いささかイラッとしながら振り返ると、亜麻色の髪を一本の三つ編みに纏めた少女が真っ直ぐに濃い青の目を向けて駆け寄ってくる。

「本!! その『植物変化論』を譲ってくれないか!？」

「は?」

可憐な容姿とは裏腹に、亜麻色の髪の少女の口から出てきたのは男勝りな言葉。

一瞬虚を突かれたユーリだが、ハッと我に返るとこういうときのマニュアルを思い出す。

「申し訳ありません。この本を待っている方がいらっしゃいますので、貸し出し予約申請をしていただけませんかでしょうか?」

「だ、ダメか?」

恐る恐るといった様子で問う声にユーリは首を横に振る。

「申し訳ありません。先に取り置きを申請された方がいらっしゃいますので」

「そ、そうか……」

がつくりと項垂れた姿を申し訳なく思いながら、ユーリはバックヤードに向かう。

(このペースだと本当に科学系の図書が無くなっちゃうかも……)
配送カートを押しながら、ユーリは深刻に考え込む。

二ヶ月間、ユーリ達が頑張って準備した図書がすべてなくなる。という事は、一週間司書達が棚に納めてきた図書をまた走り回ってかき集めるという事だ。

「……」

ぞっと青褪めたユーリは、バックヤードに戻る。

（やばい。マジで逃げたくなってきた……）

「おう。ユーリ」

「あ、ロランさん。……何？それ」

中央カウンターに向かっていると、大きな立て看板を数人の司書と抱え持つロランに出会った。

「『貸し出しされた図書の一覧？』」

立て看板に貼られている紙の一番上の文を読んだユーリに、ロランが応える。

「ああ、こいつを専門階の外に出して、その隣に予約申請受付を作る。じゃないと科学系以外の専門階利用者の邪魔になるからな」

ロランの後から、男性司書が机といすを持って来ている。

「そっか、助かるよ。もう、こっちもいっぱいいいっぱいで……」

「しょうがないさ。科学系の図書はやたら高いからな。それをタダで借りられるんだ。人が集まるに決まっている」

げっそりと肩を落としたユーリの頭をロランが慰めるようにぽんぽんと撫でる。

ロランが作った立て看板（正しくはクライヴが考え付いた作戦らしい）は功を奏し、カウンターの混雑はどうか収まり、司書達はようやく落ち着いて仕事をする事が出来るようになった。

しかし、利用者がいなくなる事はなく。

その日、司書達は閉館時間まで休むことなく働く事になった。

「そんな事があつたんですの？」

「うわぁ」

今日は授業が比較的緩やかなアリナとフィーナと共に中庭で昼食を摂る約束をしていたユーリは、昨日の王立学院図書館専門階の様子を語った。

「専門階が混雑してるってのは聞いてたけど、そこまで酷いとは知らなかったよ」

首をすくめたフィーナにユーリは疲れたように溜息をつく。

「昨日は休日だったのも関係してると思うんだけどね」

科学系の図書が結局ほとんどなくなってしまった専門階の本棚を思い出す。

貸し出しは一瞬だが、それまでに準備にかかった時間を思うと何だか目からしよっぱい水が出そうになる。

「うーん。どっちかっていうと、『学研』が近いせいじゃないかな？」

「何で？」

きょとりと目を丸くしたユーリにフィーナとアリナが驚いたように顔を見合わせる。

「ユーリ、知らないの？『学研』の成果を競って科学科と魔導科が対立してるってすごい噂だよ」

「うそっ!？」

思わず魔導科の生徒であるアリナを見る。

「事実だそうですわ」

こくりとアリナは頷く。

ここしばらく、授業と図書館の業務でいっぱいだったせい

ですっかり学内の事に疎くなってしまったらしい。

「そのせいで今年の『学研』は他学科の学生の入場を制限するって」「ええっ！？ つまんない」

学科ごとに校舎が離れていて、他学科との交流が少ない『学院』で他学科と交流する場のひとつが『学研』である。

「せっかく魔導科の魔導実践とか騎士科の演武が見れると思ったのに」

ユーリが嘆くと、フィーナも同意した。

「あたしも普通科の植物学部の研究見たかったなあ」

「わたしも植物学部の新種植物には興味がありましたのに……」

はあ、と溜息をつくアリナにフィーナが珍しそうな顔を向けた。

「意外。魔導科の生徒なのに科学科に入るかもしれない学部に興味あるんだ」

「いちいち対立しているのは一部の学部だけです。わたし個人としては科学の発展もこの国に必要なものであると考えていますわ」

「貴族出身の魔導師って、結構魔導崇拜思考でガッチガチの人が多いのに」

フィーナの齒に衣着せぬ物言いにアリナは少し顔を顰めたが、ツンツと澄ましたように咳払いをする。

「魔導は確かに尊いものですわ。しかし、それ故に使える人が限られるのも難点。そして、現在の魔導では魔力の少ない市民が自由に魔導を使うことは難しい」

「魔鉱石」と魔導機は高いしね」

ユーリは図書館で使うトランシーバー型の魔導機を思い出す。

『迷子の魔導書』事件で壊れてしまった魔導機の修理に恐ろしくお金がかかった。

「何かの冗談か？」と思える金額が並ぶ領収証が事件の犯人達に回されるのを知って少しばかり気の毒になった事を覚えている。

魔導機の原因力になる“魔鉱石”は採掘できる場所が少ないうえに市場に出回る事が少ない。

その上、“魔鉱石”を細工して魔導機に利用できるようにする『魔導技師』の数も少なく、いよいよ魔導機と“魔鉱石”の価値は跳ね上がり、市民の手が出せないほど高価になる。

「四年前の戦争も“魔鉱石”採掘場の利権を争った戦争だったしね」

高価で利用価値の高い“魔鉱石”は戦争の火種にもなる。

うかつに採掘できないのも“魔鉱石”の値が吊り上がる理由だろう。

「しかし、魔導が使える・使えない事による市民の格差は国として生まれてはいけないモノですわ。わたしは魔導師を志す若輩者ですが、それ以前にザラート王国を支えるエリメルバ侯爵家の人間でもあります。アリナというザラート王国の民でもあります。真に国を思う国民であるならば、魔導では補いきれない『穴』を埋め、国の安定と繁栄を助けるためにも、科学は必要と考えるでしょう？」

気負うでもなく、ただ当然の事のように言うアリナは『貴族』だった。

学生らしい瑞々しさの中にあるのは、国を支え守る事を生まれた時から背負ってきた『貴族の誇り』。

ユーリの様なポツと出の貧乏貴族では背負えない、歴史と誇りをア

リナは背負っていた。

「本当に意外だ」

「？」

生垣を背に座っていたユーリ達は生垣の向こうから聞こえた声に振り返る。

「あ……」

「昨日の司書？ 『学院』の生徒だったのか」

生垣の向こうから現れたのは亜麻色の髪の少女。

ユーリと同じ普通科のエンブレムをつけているので、セフィールド学院普通科の生徒らしい。

「ユーリ。この方は？」

「昨日専門階で会ったの」

「ミーシャ・ヴェルデ。普通科生徒だ」

威風堂々とした口調で自己紹介した亜麻色の髪の少女が、ユーリに手を差し出す。

「あたしはユーリ・トレス・マルグリット。普通科の生徒、図書館で司書のバイトしてるの。……こっちはフィーナとアリナ」

亜麻色の髪の少女、ミーシャの手を握り返したユーリは隣に座るフィーナとアリナを指し示す。

「フィーナ・キャラウェイ。医療科生徒。医学部志望かな」

にこっと人懐っこい笑みと共にフィーナは青のエンブレムを指し示す。

「アリナ・ユニッセイス・ヴィ・エリメルバですわ。魔導科で応用

魔導学部を志望しております」

それぞれの自己紹介が終わった後、ミーシャが少しすまなそうに眉を寄せた。

「盗み聞きする気はなかったんだが、すまない。聞こえた内容が少し気になってな」

「？」

わけがわからず首を傾げたユーリにミーシャはふっと微笑む。

「魔導科の生徒が科学科設立をどう思っているのか、少し気になった」

「ああ、なるほど」

フィーナが頷く。

「教授や先輩方はぴりぴりしていてね。打倒魔導科をスローガンにしているとか聞いてね」

少しばかりうんざりだとミーシャは溜息をつく。

「科学科入りが微妙な学部は特に殺気立っているだろうね？」

フィーナが問うと、ミーシャは頷く。

「ねえ、他学科なのに何でフィーナは普通科のあたしより詳しいの？」

「いま、どの学科でもこの話題で盛り上がっていますわ。……むしろ、ユーリが知らない事に驚きなんですが……」

「……すいません」

図書館業務が忙しかったんです。

ユーリが項垂れていると、ミーシャが軽く笑った。

「ところで、あなた達は植物学部に興味があるのか？」

「ええ、わたしは新種の花の苗を見たいと思っていましたの」

「うん。あそこの新種の苗はいつも面白い」

こくんと嬉しそうに頷いたミーシャの顔を見てユーリは問う。

「ミーシャさんは、植物学部志望？」

「ミーシャでいい。その代わり、わたしもあなた達を名前で呼んでいいかな？」

ミーシャの問いに三人は首を縦に振る。

「うん、植物学部志望。植物の品種改良や土壌改良技術に興味があつてね」

「なるほど」

「わたしは植物学部が科学科に入らなくても植物学部に入るつもりだから、何か面白い苗が出来たら分けてあげる」

「いいんですの？」

「うん。貴族で魔導師なのに、科学を肯定してくれる人がいるのは嬉しいし、ちょっとでもこうした交流があれば、お互いの印象が変わるかもしれないね」

「ふふ、そうですわね」

（わあ、大人だ）

にっこりと微笑みあうミーシャとアリナを見てユーリはただ見とれた。

同じ年なのに、ミーシャとアリナは随分視野が広く、対応が大人だ。対立しあう教授陣に彼女の爪の垢を煎じて飲ませたい。

昼休憩のチャイムが、生徒達に等しく降り注いだ。

4Pガール・ミーツ・ガール（後書き）

反面教師って奴でしょうか？

久しぶりの投稿です。

5Pガール・ミーツ・ボーイ（前書き）

普通科の校舎での一幕。
『学研』まで残り七日。

5Pガール・ミーツ・ボーイ

足早に駆け回る生徒や教授。

色とりどりのポスターや看板。

落ち着いて校舎を見回すと、周りは『学研』一色になっていた。

図書館業務に追われていたせいで学内の事にすっかり疎くなってしまったユーリにしてみると、何だか置いてけ掘りを喰らった気分だ。

「どけどけっ!! 危ないぞ!!」

「おい!! ビーカーが足りないぞ!!」

「その媒介はもっと丁寧に扱え!!」

「誰だ!?! そのフラスコ動かした奴!!」

わいわいがやがやと走り回る教授や生徒の集まる先は普通科の大会議場。

そこにユーリは足を向けると、会議場の窓や扉にユーリと同じように中の喧騒を覗いている生徒達がいた。

「やっぱ、科学科に転科しようかな?」

「バツカ、お前科学系の必修科目とってねえじゃん。無理無理」

「うわあ、化学学部のある、なに?」

どうやら、彼らはユーリのように今年の九月から学科生・新三年生になる生徒達らしい。

がやがやと騒ぐ生徒の中にふと、ユーリは見知った亜麻色の三つ編みを見つけた。

「ミーシャ」

亜麻色の三つ編みがふわりと舞い、濃い青の瞳がユーリを見た。

「ユーリ」

「ミーシャも見学に来たの？」

「見学……うん。見学に来た」

明らかに野次馬である自分達を正当化する言葉に苦笑しながら、ミーシャは頷く。

「やっぱり、科学系の学部の展示品は派手っぽいね」

「うん。他の学部に比べて研究結果が分かりやすいから、パフオーマンスもやり易いんだ」

「ふうん。植物学部ってどこかな？ あたしも新しい花の苗は欲しいな」

「おい！！こらそこっ！！ 関係者以外は立ち入り禁止だぞ！！」

背の高い厳格そうな男が会議場内でうろついている、ある少年達を指差して怒鳴った。

「げっ！！」「やべっ」と言いながら少年達はユーリ達のほうに走ってくる。

「こら待て！！」

「魔導科の生徒じゃないだろうな！！」

「そこ！！何を見ている！？」

少年達の進行方向にいるユーリ達にも鋭い声がかかった。

「げっ！？ 逃げるぞ！！」

「え？なんかやばいの？」

わたわたと四方八方に走り出した生徒達の喧騒の中、ユーリはミ

シャの方を向いた。

「アーノルド・ウェンハイム教授は説教がねちっこくて、くどくて長つたらしい事で有名な先生だ」

こちらに声をかけた眼鏡の先生を指差しながら、ミーシャはユーリと共に知る。

「っ！？ 追い駆けて来てる！？」

ミーシャの解説を聞いて、思わず振り返ったユーリは後ろから迫ってくる白衣集団を見て顔を引き攣らせた。

生徒達はほとんどいろんな方角に逃げたようだが、何故か、白衣の集団と一人の金髪の少年がユーリとミーシャを追い駆けてくる。

「彼は……、確かりーデル・マクスフェル先生に注意されていた少年だな」

白衣の集団の前で走っている金髪の少年を見たミーシャが淡々と告げる。

「え？ そのリーデルなんたらっていう先生ってあの厳格そうな先生？」

こくりと頷いたミーシャを見、ユーリは理解する。

一番最初に目をつけられた、不法侵入少年がこっちに走ってくるから、あの白衣の集団もユーリ達を追い駆けているらしい。

「っ、ちよつと！！ その金髪のあんた！！ 追い駆けて来ないですよー！！」

「うるせーっ！！ 捕まるならもろとも道連れじゃああー！！」
危機迫った少年の言葉にユーリとミーシャは顔を見合わせる。

「なあっ!? ジョーダンじゃないっ!! 断然お断りっ!!」
「くっ、来るな!! わたし達は関係ない!!」

「待てええええっ!!」

怖い顔をした白衣の集団がどんどん近付いてくるさまは、何だかものすごく不気味だ。

「いゝやゝあああああっ!!」

ユーリの悲鳴が普通科校舎に高らかに響き渡った。

「どこに行った?」

「ダメだ。見失った」

白衣を纏った数人の生徒がぼそぼそと話し合っている。

「もういい。戻って『学研』の準備をしよう」

「はい」

ぞろぞろと教室から出ていく姿を、ユーリは机の下で息を潜めて窺^{うかが}っていた。

教室から白衣の生徒がいなくなるのを確認したユーリは詰めていた息をほっと吐き出した。

「ふたりとも、もう大丈夫だよ」

机の下から抜け出したユーリは服についた埃を払いながら、埃まみれの大きなカバーに声をかける。

「ぶはっ!!」

「ごほっ、けふんっ」

埃まみれのカバーから出て来たのはミーシャと金髪の少年と壊れて

しまっている天体模型。

「と、とりあえず、ここから出よっ、しゅんっ!!」

「けふんっ、こふっ!! うん。そうしよっくふっ!!」

「賛成っ、げほっ」

舞いあがった埃と戦いながら、三人は隣の教室に入り込んだ。

物置代わりにされていた教室から抜け出たユーリとミーシャは窓を全開にしてようやく一息ついた。

「っ、はあく。助かった。捕まるかと思った」

「あんたのせいでしょうが!! あんたの!!」

椅子に座ってだらりと伸びている少年をぎっとユーリは睨みつける。

短く刈り込んだ金髪についた埃を少年は払い、勝気そうな榛色の目をユーリとミーシャに向けた。

どこにでもいそうな顔立ちの少年だが、好奇心で輝く榛色の瞳にふと、記憶が揺り起こされた。

（あ、昨日専門階にいた子だ）

ユーリがそう思っていると、ミーシャはいささか不機嫌そうに少年を睨んだ。

「君は……。確か、基礎化学学の……」

「知り合い？」

「選択する授業が似ていて、よく見かけるんだ。彼を」

端的なミーシャの言葉をユーリは自分なりに噛み砕いてみる。

「つまり、顔は知ってるけど、名前は知らない赤の他人だと」

「ああ」

「おい。それ、本人の前で言うか？」

堂々と頷いたミーシャに少年は引き攣った笑みを浮かべる。

「俺はイオン。イオン・ガスパール！！ 科学科の科学学部志望！」

ニツと笑って自分を指差すイオンは『学院』の制服を軽く着崩し、首からゴーグルをぶら下げている。

「あたしはユーリ・トレス・マルグリット」

「わたしはミーシャ・ヴェルデだ」

イオンをユーリとミーシャは微妙な表情で見やる。

「いやゝ。お互い災難だったな。 まっ、これもなんかの縁ってことで、よろ」

にこやかに微笑むイオンにユーリとミーシャが切れた。

「あ、ん、た、がっ！！ 呼んだ災難でしょうが！！」

「わたし達はお前の軽率な行動に巻き込まれた被害者だ！！」

「まゝまゝ。どうぞ」

だが、イオンは反省の欠片もなくカラコロと笑う。

その様子にミーシャが呆れたようにこめかみを揉んでうめく。

「何故、関係者以外立ち入り禁止中の大会議場に入ったんだ？」

「いやあ、だってな？ 去年までは『学研』準備中も入場オッケイだったじゃん？ それなのに、今年はダメって酷くねえ？ それに、隠されると余計見なくなるのが男のサガっていうか、本能だからさあ」

『学研』準備中の大会議場に無断侵入した理由は、羽毛よりも軽い吹けば飛ぶようなアホな理由だった。

「無節操なお前の行動のせいでわたし達は恐怖体験をした」

「そうだよ！！ 白衣着た人達にあんな風に追い駆けられるのって怖いんだから！！」

ユーリはほとんど忘れかけている、前世日本で柴崎由利だったころに見たホラー映画を思い出して身震いする。

あの集団の白衣に血糊でもべったりついていたら逃げる前に卒倒していた。

ユーリとミーシャが心底げんがりしていると、さすがのイオンも気の毒になったらしい。

「あは、スマン」

この世の悪事など何も知らないようなあっけらかんとした清々しい笑顔に殺意が湧く。

「もういい。行こう、ユーリ」

「うん。 あたし仕事あるし」

イオンを無視することに決めたミーシャとユーリは彼に背を向けて教室を出た。

「あ、ちょいまち。 ちょいまち！！」

わたわたとイオンが焦ってユーリとミーシャを止める。

「なんだ？」

肩にかかったイオンの手を煩わしそうに払ったミーシャの目には隠しきれない苛立ちがあった。

一瞬、その目に怯んだイオンだが、気を取り直すように咳払いをして姿勢を正す。

「あんた、『植物の化学』をいま王立学院図書館で借りてるよな！？」

「ああ。借りている」

何故そんな事を訊く？と言うように首を傾げるミーシャ。

一方、「いよっしゃ、らっきー」とガッツポーズをするイオンを見たユーリは嫌な予感がする。

「その本、三日間だけでいいから貸して!!」

「え？」

「絶対ダメ!!」

ユーリの予感大的中。

頼んだイオンだけでなく、頼まれた事がうまく飲み込めていないミーシャさえ驚いた顔でユーリを見た。

「図書館の本は借主の身元がきちんとわかっているのを前提に貸し出しているの!! 図書館の管理下でない貸し出しとか、また貸しされたら図書館の本が無くなったり、傷ついた時に揉め事になるから絶対ダメ!!」

一息に言いきったユーリは肩を揺らして荒い息を吐く。

「ええ。でもさあ。俺もミーシャも『学院』の生徒じゃん。ケチケチしないで、ちょっとくらい融通してくれてもいいじゃん」

「絶対ダメ!!」

イオンは面倒くさそうな顔でぎっと睨むユーリを見下ろす。

「わたしは、一言たりともお前に貸すとは言っていないんだが？」
馴れ馴れしいイオンの手をミーシャは払い落とす。

「いや。三日、三日だけでいいからさ!!」

「お断りする。お前のようにちゃらんぽらん奴にまた貸しして本が傷ついたら弁償するのはわたしだ」

「ええ。っ。頼むよ!! なっ、このとおり!!」

「断る。わたしもあれを読み始めたばかりだ。 苦勞して借り出した本、そう簡単にまた貸しできるか」

頭の上で両手を合わせて拝むイオンにミーシャは冷たい視線を投げかけた。

「返却されるのを大人しく待て」

「そーだよ」

少女二人の冷たい視線を受けたイオンは悔しげに地団太を踏む。

「根性悪の、ドケチ女!!」

「うるさい!! 節操なしの馬鹿男!!」

ミーシャが投げた靴がイオンの顔面に当たって跳ね返った。

5Pガール・ミーツ・ボーイ（後書き）

新キャラ、イオン登場。

ちよっとはっちゃんけたキャラが書きたかったのです。

6P 水面下の混沌（前書き）

『禁制魔導書』達も『学研』に興味深々。

ちなみに、彼らは歴代最高・最上の魔導師が心血を注いで作りあげた極上の魔導書です。

なので、彼らの話にお気を悪くしたとしても許してあげてください。

6P 水面下の混沌

<その少年は、馬鹿だな>

<ああ、アホだ>

「あはは、そう言うと思った」

ユーリは『禁制魔導書』階にいた。

放課後、イオンが起こした騒動とその後ミーシャに図書しんらつのまた貸しをせがんだ様子を語ると、やはり『禁制魔導書』達は辛辣なツッコミをいれた。

<その少女。ミーシャか。どこかの武人を親に持つ娘か？>

<同い年とはいえ男に回し蹴りと一本背負い極めるのは、なかなか難しだろう>

「うん。お父さんが王宮勤めの騎士で、護身術を一通り叩きこまれたんだって」

<ほう>

華麗に極まった回し蹴りと一本背負いを思い出したユーリはくすくすところえきれずに笑った。

あの後、イオンに図書のまた貸しを迫られたミーシャは彼と言い争い、結局喧嘩になった。

その最中、

『いや、こっちにも事情があつてだな!! 　　つて!! わあ!! 』

『いい加減に！！ やあっ！！』

しつこいイオンをミーシャが振り払った瞬間、バランスを崩したイオンがミーシャの体に抱きついた。

『あ』

本人は後々、凭れかかったただだと抗弁するが、ユーリから見れば、ミーシャの胸に顔をつっ込んで抱きついたイオンの姿しか見えず。

『きゃあああああっ！！』

いままで男勝りな口調しか使っていなかったミーシャが初めて少女の様な言葉使いをした事に驚く間もなく、イオンの体が宙を舞った。

「でも、ちょっとほっとしたんだ」

<何をだ？>

「ミーシャもアリナもフィーナもきちんと自分の道を決めて進んでいて、特にミーシャとアリナはすごく立派な事を言ってて、……なんていうか、その……自分が置いて行かれたような気分になって……」

科学を志すミーシャと魔導を志すアリナはお互い勉学に研鑽する立場であり、周り是对立しあっているというのに、自らの意思を強く持って、己の意思でお互いに歩み寄ろうとしている。

普通の人には出来ない立派な志を、同じ年でありながら二人は抱いている。

だから、ほっとしたのだ。

ミーシャがイオンと喧嘩するのを見て。

彼女も自分と同じ年の生徒だと実感できて、ほっとしたのだ。

そう言う^{なが}と永きを知っている『禁制魔導書』達は軽蔑するだろうか？

<お前の小ささは誰よりも我らが知っている>

<いまさら何を言うか>

<そーそー、お前の胸の小ささも>

「うっさい!!」

茶化す『禁制魔導書』達にユーリはムツと顔を顰めた。

結局この魔導書達はちゃんぽらんなのか、と少し落胆する。

<小さなお前はゆっくり大きくなればよからう>

<大きくなる幅も限られていそうだし>

<どうせ位など無いに等しいほどの小さな貴族の娘なのだしな>

「なんか、さりげなく失礼な事言ってない？」

小さいだの、大きくなれる幅など少ないだの……。

(でも、氣遣ってくれてる?)

「ありがとう」

さわさわと騒ぐ魔導書達はいつもと変わらないように囁き合う。

<どうせお前との付き合いも我らにしてみれば瞬きに等しい>

<我らはここから出られんからな>

<我らの退屈を忘れさせてくれるのはお前だけだ。ユーリ>

(結局、退屈しのぎなのね)

そう思って落胆するが、でも、さっきとは違って気分が大分上昇した。

「じゃあ、あたしはしっかり学校の勉強でもしようかな」

<少しでもお前の伸びしろが伸びるように頑張れ>

<どうせ、それほど伸びないだろうがな>

「余計なお世話!!」

『禁制魔導書』達はやっぱり一言多い。

ムツとユーリが顔をしかめても、我関せずと魔導書達はひそひそと話をし続ける。

<そうそう、『学研』といえば……>

<ああ、『学研』の成果の良し悪しで学科の予算分配が決まるらしいな>

「え？」

<ほほう、それでは各学科の教授陣も必死になるわけだ>

<なるほど>と頷き合う魔導書達をよそに、ユーリは頬を引き攣らせる。

魔導科と新科学科の対立は知っていたが、事態は予想より遥かにシビアらしい。

<魔導科に行っていた『一級魔導書』や『一級危険魔導書』が言うのだ。間違いはない>

<司書達も今年の『学研』には興味津々らしい>

<仕事サボってよく噂話をする事>

「後でサボってた司書の名前教えて。館長にチクるから」

ペンを回してユーリは司書の噂話を拾って来た魔導書達に顔を向ける。

<魔導階にたむろする魔導師共もよく話題にしているね>

<ああ、新学科加入学部の結果を賭けに使ってるしな>

「……」

司書達が忙しい間、魔導階の風紀は乱れに乱れていたようだ。

（まともな魔導師って世の中にいないの!？）

ユーリは顔をしかめて溜息をつく。

魔導階の見回りを強化してもらうようにエリアーゼ館長に報告しなければいけない。

＜そういえば、『祭壇の上の月』お前、カイゼル教授のところに行っていたんだろう?＞

＜何か面白い話は聞けなかったかい?＞

＜ああ、ヴォルヴァが『学院』関係者一同が勢揃いして行われた『大会議』中に暴言吐いて、謹慎処分になったようだ＞
＜ヴォルヴァ?＞

＜ああ、あの二流どころの占術魔導師か＞

＜そういえば、カイゼルはヴォルヴァの上司だったな＞

年がら年中ヴェールを被り、胡散臭い感じの女魔導師をユーリは思い浮かべる。

助教授、という立場のせいか、それとも魔導書達が言うとおり、魔導師としての力がないからなのか、受け持っている授業はほとんど無いと聞くあの先生が謹慎を喰らったところで特に問題はなさそうだ。

魔導書達の話から聞くに、そう思っているのは彼らも同じようだ。

しかし、

＜それに不満を持つ教授方がいるらしい＞

他の教授のところに行っていた魔導書が魔導書やユーリの予想を裏

切る発言をした。

<しかし、占術魔導師としては二流どころか三流近いぞ？>

<擁護しても利点はないと思うがね？>

<今回ばかりはヴォルヴァが悪いだろう？>

困惑気味に『禁制魔導書』達は言う。

魔導師に対して評価が辛口なのは標準設定だ。デフォルテ

<あれじゃね？　そこは女の色仕掛けってやつで、たらしこんだんじゃ……>

<ぼっか、ヴォルヴァは魔導師としても三流どころだが、女としても二流落ちだぞ>

<乳も小さいし、無駄にプライドあるし>

<面^{ツラ}もパツとしないしなあ>

思わずペンを握る手におかしな力が入り、字が歪む。

（やめてくんない！？　乳発言！！）

しかし、いま下手に口出しするとユーリの方に視線が来て、ヴォルヴァとユーリの胸元が比べられ、屈辱的な発言をされる事が予想できる。

それだけは避けたいユーリは賢明なる沈黙を守った。

<お主ら、女は乳じゃなく尻だと、わしの主は言っておったぞ>

<じゃあ、なんだ？　ヴォルヴァは教授方を（自主規制）して擁護を得たと？>

<いや、その方法をとったにしてはあやつの尻に（自主規制）な感

じが足りんな>

<じゃあ、意味無いじゃん!!>

<いや、あれじゃないか？ 無駄にプライドある高飛車な女を（自主規制）して、（自主規制）するのが男の自尊心と快感を高めるんだって俺を作った魔導師は言ってたぞ>

「やめんか!! 18禁魔導書共が!!」

最早、自主規制ワードが多すぎて文章化できません!!

（『禁制魔導書』の『禁制』って18禁って意味の『禁制』なわけ!?!）

近頃、そっちの解釈の方が正しいと思い始めて来たユーリである。

<いやいや、あいつらははヴォルヴァの事なんかどうでもいいんだって!!>

<奴らは魔導科より科学科が擁護されるのが気に喰わないだけさ>

<あ、なるほど>

合点がいったのか、『禁制魔導書』たちは感嘆の溜息をついた。

<カイゼルはヴォルヴァを煙たがってるしね>

<『占術が何たるか、わかっていない』っていつもぼやいていたしね>

<じゃあ、なんでヴォルヴァはカイゼルの下にいる？>

<ああ、ヴォルヴァは無能もいところだが、オストロと同じ魔導師の互助組織に加盟しててな。オストロはヴォルヴァの師に泣き付かれて、渋々用意した就職先がカイゼルの下らしい>

（いわゆる、コネ入社ってやつ？）

魔導書達が話すオストロという名はおそらく、アルカス・カリスト
Ⅱアルス・オストロ教授。

魔導科の惑星魔導学の教授で魔導科の教授主任でもあり、オストロ
侯爵家の一員である、貴族^{エリート}中の逸材^{エリート}だ。

（でも、あたしあの先生苦手なんだよねえ）

図書館で働くユーリにそれなりに親切なのだが、何となくいつも憐れむように生活の事や支援について語ってくるところから察するに、貴族の娘であり、『学院』の生徒でありながら働くユーリを憐れんでいるらしい。

馬鹿にして、侮ってくる奴らは腹が立つ。しかし、見当違いの憐れみで施しをしてやろうとしてくる奴は虫唾が走るし、どうにも扱いづらい。

だから、『嫌い』という感情でなく、生理的な『苦手』が際立つ。

くそのさい、ヴォルヴァの師はかなり希少な魔道具をオストロに渡したらしい＞

「って！！ 賄賂かい！！」

思わずツツコンだユーリに『禁制魔導書』達は呆れた様に溜息をつく。

くよっぱど厄介払いしたかったんだな。ヴォルヴァの師は＞

くオストロも分野違いだのなんだの言い訳しながら、カイゼルに援助の約束をしてヴォルヴァを押しつけたからな＞

「どんだけダメなの。ヴォルヴァ先生」

くダメダメだな＞

「なんでクビにならないの？」

＜ヴォルヴァの親もかなりの資産家らしくてな。 貴族魔導師達の
派閥には必要な一員らしい＞

（うわあ、知りたくなかった。裏事情……）

『学院』、学校内で派閥争いとか本当にやめて欲しい。

＜まあ、生徒には害はなからう＞

「いやいや。あの先生、靈感商法マジでしてたじゃない！！ 害ありまくりだから！！」

＜心配すんな。だまされるのはアホな貴族のボンボンだ＞

「貴族の子弟をだますと後々面倒臭くない？」

＜大丈夫だ。貴族の奴らが自分の失態をそうそう大っぴらに暴露するものか＞

＜そうそう、不名誉な事は隠したいのが貴族のサガだ＞

「あ、そー」

頬杖をついたユーリは半眼で溜息をつく。

『禁制魔導書』達の言う貴族がどんな貴族であったか聞いてみたい気がする。

しかし、『魔導』という限られた者達が使う秘匿された学問を記す魔導書達だ。彼らが語る貴族の事を知ると、知りたくなかった裏事情まで語られてしまう事になるかもしれない。

そういう面倒くさそうな裏事情をユーリは知りたくはない。

「派閥争いやら、資金調達やら、魔導ってもっと高尚なものだと思っただけ、意外と俗っぽいんだね」

＜霞^{かすみ}を食って生きていける魔導師はおらん＞

＜研究に金は必要だと、前に言っただろうに＞

しみじみ言ったユーリに魔導書達は呆れたように応える。

＜金のない魔導科の学部はきついぞ？＞

＜魔導科の資金管理をしているせいでリドルは男子生徒と禁断の関係を結ぶようになったんだしな＞

「あの先生の話題はやめてください」

リドル教授にユーリは会った事はないが、会う機会があっても会いたくない。

魔導書達の話が衝撃的すぎてもうあの先生を先入観なしで見ろ事出来ない。

＜まあ、リドルが生徒達と（自主規制）な関係になったのも、資金調達が大変になってかららしいな＞

＜資金調達は大変だからなあ。：俺は資金調達のために作られたしな＞

＜我を作った魔導師は可愛い子弟を囲って（自主規制）して資金を作ったぞ＞

＜そうそう、俺を作った魔導師はさみしい夫婦生活送ってる貴婦人達を（自主規制）して資金を提供してもらってたぞ＞

「やめて！！ 特にあんた！！あんた作った魔導師って何考えてんの！？ 可愛い子弟囲うってそれだけで資金の無駄じゃん！！ つーか、そこ！！ あんた作った魔導師がヒモだったなんて知りたくなかったから！！」

＜まあ、仕方ないだろう？ 奴は魔導と体以外はいまいち微妙な奴だったんだから＞

「体とか生々しい発言やめてください！！」

＜いや、しかし、奴が囲っておった美男子は王の愛人になるほどの美貌でな、貴族達と月に数回（自主規制）＞

「王国の裏事情まで暴露しないで下さい！！学校内の裏事情だけでお腹一杯だから！！」

＜根性ないのう＞

（なくて結構です……）

脱力したユーリはソファに座りこむ。

＜いやあ、そう言えば、俺作った魔導師は可愛い女の弟子と禁断の関係を＞＜我を作った魔導師は何人も貴族の男共からがつつり資金を引きずり出しておったな＞……などという話は、まだ生易しい方で、もう耳を塞ぎたくなるような18禁話が至る所で話される。

（わかってたじゃない。あたし……）

歴代最高の魔導師が作った魔導書が、コレ達だ。

（こんなもん作り出す魔導師がまともなわけないって……）

ふっと遠い目をしたユーリは大人しく耳栓をして課題に勤しむ。

いま、ひとりの少女が静かに大人の階段を上った。

6P 水面下の混沌（後書き）

『触らぬ神に祟りなし』、『見ざる、聞かざる、言わざる』は厄介事から身を守るための最強の盾だと、ユーリさんもわかっているようです。

7P 其れは密やかに紡がれて

<っ、と。なんだ、ユーリの奴が寝てるぞ>

魔導書達が見下ろす先で、ユーリは本に突っ伏して眠っている。

レポート用紙は課題らしい文章で埋まっている。

どうやら、課題を終えた後、本を読むうちに眠ってしまったらしい。

<おい、ユーリ。こんな所で寝ていると風邪をひくぞ？>

<ユーリ><起きろ><ユーリや>と彼女を呼ぶ声は『禁制魔導書』達を伝染していく。

<起きないぞ>

<我らはユーリが起きなければ魔導を使えん>

<困ったのう>

さわさわと『禁制魔導書』達はどうにか出来ないかと話し合う。

<くん？ エリアーゼだ>

<こちらに来るぞ>

『禁制魔導書』の不可視の視線が『禁制魔導書』階の扉に集まる。

「お久しぶりですわあ。『禁制魔導書』方」

<エリアーゼ>

<珍しい>

『禁制魔導書』のある部屋の扉を開けた金髪碧眼の美女は『禁制魔導書』を前ににこりと微笑む。

「ユーリさんは来ていませんか？ お話があったんですけれど？」

<暖炉前のソファで眠っている>

<起こしてログハウスに戻してやってくれ>

「あらあら、はいはい」

くすくすと笑いながら、歩くエリアーゼに魔導書達は囁く。

<エリアーゼ。お前、気づいているだろう？>

<ログハウスに魔導の気配がある>

<ユーリは気づいていない>

<あれを何故放置している？>

「……」

エリアーゼはにこりにこりと微笑むだけで何も応えない。

それにしびれを切らしたのか、一冊の『禁制魔導書』がエリアーゼの前に落ちる。

<答えよ、エリアーゼ！！>

「そう、ですわねえ」

エリアーゼは落ちて来た魔導書を棚に戻す。

「宮廷魔導師が来てくれると図書館の評判が上がりますから」

「ね」と言いながら小首を傾げたエリアーゼに『禁制魔導書』達の反応は冷ややかだ。

<エリアーゼ>

ぞろり

部屋の温度が急速に下がり、薄暗くなる。
魔力をたっぷり秘めた部屋の空気が重苦しく濁る。

<お前が目をつけているのはそんなことではなからう？>

<小賢しい><女狐が>

<あやつの魔導師としての能力もなかなか悪くなかった>

<お前、ココの神秘を餌に、あの魔導師を利用するつもりだろう？>

どろりと体中に巻きつくような濃密な魔力に曝されながら、エリアーゼは澄ました顔でふっと微笑む。

「まあ、人聞きの悪い。入場料を取るだけです」
<否定はせんか>

「それに、魔導に詳しい戦闘要員は必要でしょう？」
<王に仕える宮廷魔導師を傭兵代わりに利用するか>
<いい度胸をしておるな>

「どうとでも」
くすくすと笑うエリアーゼはすっと目を細める。

「あなた達だって、大切な【語り手】にうっかり死なれては困るでしょう？」

その言葉に魔導書達はざわりとざわめく。

<何があった？>

<お前がココに来たのは何故だ？>

ざわざわと騒ぐ魔導書の声がまるで潮騒のよう。

潮騒を割るのは女神のように麗しい美貌の王立学院図書館館長。

「魔導書がいくつか返ってきません」

金属の小さな鐘の様な、涼しげで通りの良い声が紡いだ言葉。
その声は部屋中に響き渡り、静寂を呼ぶ。

そして、

＜それがどうした？ さっさと呼び戻せばよからう＞
＜何のために記された“紋”だ＞

訝しげかつ、小馬鹿にするような魔導書達の声が返って来た。

王立学院図書館の魔導書・図書には全て“紋”が押されている。
その中でも魔導書に押された“紋”は特殊で何かの拍子でうっかり
魔導書が持ち逃げされても必ず戻ってくるような細工が施されている。
る。

しかし、

「どうやら、かなり高位の魔導師が掠め取ったようで、“紋”の魔
導が弾かれました」

一瞬、魔導書達は困惑したようにざわめく。
その困惑から先に脱出したのはここでもかなりの古株の魔導書達。
いつもはあまり会話に参加しない彼らは、困惑する魔導書達をなだ
めるように静かに声を部屋に響かせる。
くふむ。たとえば魔導師の力が高かろうと、魔導書の“紋”はそう簡
単に弾かれるものではないのだが…＞

<何かの「儀式」に使われているのかねえ？>

「ええ、その可能性が一番高いと思います」

魔導書に記される“紋”は魔導書の持つ魔力量に比例して魔導書に対する拘束力が高くなっていく。

だが、何らかの理由で魔導書の魔力が“紋”の持つ魔力より高まってしまうと“紋”が無効化してしまう事がある。

その代表的な例が「儀式」。

魔導書の魔力を底上げして「儀式」を組み込むと、魔導書自体の魔力が高まり、“紋”が無効化してしまう。

もちろん、図書館側はそのことが分かっているから、“紋”とは別に図書カードに魔導書を利用した「儀式」の使用を制限する魔導を仕掛けていたり、魔導書を使った「儀式」の使用を禁止してはいるのだが……。

「魔導書を借りている人物と現在魔導書を手元に置いている人物は別の様で、図書カードを標的にした逆探知も成功しませんでした」

ふうっとエリアーゼが困り果てた様に溜息をつく。

<何の「儀式」が始まっているのかはわからんか？>

<我らはいまのところ何も感じない……>

<未返却中の魔導書の銘は何という？>

「未返却中の魔導書は、『神秘の手引き』『星の神殿』『惑星の影響』『マレフィキアの奇跡』。計四冊」

<ずいぶん多いな>

「ええ、ですから比較的早く気づいたんですけど……」

<やばそうなのは『星の神殿』と『マレフィキアの奇跡』くらいか？>

<『一級危険魔導書』が所在不明になるとはな>

<盗んだ魔導師は「儀式」がどれだけ危険かわかっているんだろうね？>

<王立学院図書館の魔導書に“紋”がつけられる理由を知っているのか？>

<お主、まさか、ユーリに未返却魔導書の回収をさせるつもりじゃなからうな？>

古株の『禁制魔導書』が発した声で、ざわざわと騒いでいた魔導書がふつと静まる。

エリアーゼは痛いほどの沈黙をその薄紅色の唇で裂く。

「魔導書は全て『学院』の外には出ていません。……なれば、この『学院』の生徒であるユーリさんほど『学院』を動き回れる司書はいない」

肯定ととれる言葉に『禁制魔導書』階が揺れた。

<エリアーゼ！！>

<危険だ！！>

<アレが魔導書を使えぬのを知っているだろう！！>

<魔導書を組み込んだ「儀式」をお主らが禁じている理由を忘れたか！？>

<ユーリを危険にさらす気か！？エリアーゼ！！>

「ええ、ですから、あの魔導師が必要なんです」

<訳のわからん部外者に守らせるくらいなら、ユーリを危険にさらすな!!>

<未返却魔導書の回収くらいお前が行け!!>

「そう言われましても、私達も大っぴらには動けないのです」

<何故?>

「大人の事情です?」

ハートマークとキュートなウィンクが語尾に付いた。

<ふん。下らん派閥争いか>

『禁制魔導書』達は鼻白む。

<科学派と魔導派、の教授陣の対立か?>

<ああ、魔導派には貴族が多く、科学派には新興貴族や商人がスポンサーについている>

<古きと新しき、科学派と魔導派の教授陣の対立はそのまま、この国の身分格差を顕している>

<ああ、そして、理事達もそれに乗じて暗躍しているようだしな…>

<だが、それだけではなからう><ああ、『学院』の技術を虎視眈々と狙う奴らは多い>

<他校の教授陣も『学研』に来ると聞く>

<『学研』は対立派閥を陥れるのにもってこいの機会…:>

<馬鹿馬鹿しい><下らん対立で『学院』を危険にさらし、他校に恥をさらす気か?>

<だが、お前は、いや王立学院図書館は絶対中立的立場だろう?>

「ええ、ですから館長である私は動けません」

＜お前が動けば、科学派側の教授陣は嬉々として魔導側を批判するな＞

＜また、逆も然り……＞

＜何百と月日は流れたが、人とは実に愚かで変わらぬものだな＞

「ええ」

エリアーゼはずっと顔を伏せる。

恥いるように、悔むように。

＜エリアーゼよ＞

＜我らを一時的でいい。『解放』してくれないか？＞

古い『禁制魔導書』達の声にエリアーゼは静かに首を振る。

「いいえ、あなた方を『解放』するわけにはいきません。あなた方は【真実】をその身に宿す『魔導書』なのですから」

＜戯れ言を＞

＜我らはそれ故に縛られる＞

＜この忌まわしき牢獄から＞

＜禁忌を禁忌に至らしめるがために我らがある＞

良い事も悪い事も何もかもを飲み込んだ、深い井戸の底の水はこんな風にたゆたうのだろう。

永い永い間、どろりと濁った汚泥の中に沈められた物のように、世界中の闇という闇を圧縮し、濁らせたかのように暗い、昏い声。

「ええ。ですから【語り手】は守ります」

＜ああ、この忌まわしきこの因習を継ぐ者を＞

＜この禍々しき牢獄を守る看守が【語り手】だ＞

＜異なる世界より堕とされた哀れなる魂を持つ者＞

＜何にも縛られぬ自由な魂を持つ存在＞

＜お主らはいつの世でも「そうした存在」をこの『学院』に閉じ込めて保管しておったからな＞

「ええ、【紡がれぬ言霊】を受け継ぐ器を守る事が、この王立学院図書館館長の務めでしたわ」

＜ああ、ここに集められた者達の中でも【語り手】は特異中の特異だっただろうよ＞

＜何しろ狂気に侵された賢者の代弁者だからな＞

＜悲哀に身を落とし永遠^{とこしえ}を彷徨う生命を慰撫する者だったからな＞

＜自由なるがゆえに孤独な【歌い手】でもあったからな＞

＜唯一無二がゆえに何にも染まらぬ者であるからな＞

「あの魔導師はいわば、『保険』です。ここを守り、継ぐための【語り手】を守るための」

＜愚かな＞

＜忌々しい＞

「あなた方とて、“先代”の願いを守りたいでしょう？」

『禁制魔導書』達がふっと押し黙った。『学院』がややこしい時に「儀式」が行われようとしている。

海千山千の『禁制魔導書』達は「儀式」の標的になる物がわかる。
そして、その標的になる物を『禁制魔導書』達は守りたいとも思っている。

<ええい。忌々しい!!>

<仕方あるまいか……>

しばらくすると、『禁制魔導書』達の不満げな声とブツブツ文句を言う声や諦観するような声が聞こえ出す。

<ユーリを起こせ、エリアーゼ>

<……ユーリの意味に任せよう>

不承不承を体現するような『禁制魔導書』達の声を聞きながら、エリアーゼはくすりと笑う。

「あの方の“夢”は邪魔させません」

もちろん、エリアーゼとて、ユーリを苦しめる気はない。

だからこそ『保険』を野放しにしているのだ。

（しっかり働いてもらいますわ。アヴィリス・ツヴァイ||ネルーロウ・スフォルツィア）

エリアーゼの手が『学院』の制服越しにユーリの細い肩にかかる。
ぽんぽんと少し強めに揺るように叩く。

「ユーリさん。ユーリさん。起きてください、風邪をひいてしまえますよ?」

うーん、と目を擦りながら、ユーリが起き上がる。

ぽんやりとした彼女の目がふっと理性の光を取り戻す。

途端、その瞳は真ん丸く見開かれる。

「あれ？ エリアーゼさん！？」

異なる世界を見て来たのであろうその漆黒はどこまでも深く、深く澄んでいた。

7P 其れは密やかに紡がれて（後書き）

アヴィリスの動向はバレバレだったようです。
久々投稿で、すいません。

しかも、しばらく話に急展開はなさそうです……。

8P 普段笑っている人が怒ると怖い（前書き）

久しぶりの投稿です。

長い事投稿しなくてすいません。

8P 普段笑っている人が怒ると怖い

「えっ！？未返却魔導書!？」

ユーリの素っ頓狂な声が『禁制魔導書』階に響いた。

「ええ、『一級魔導書』『一級危険魔導書』を含めて計四冊」

「よんっ……」

聖母のように柔らかな微笑と共に言われた言葉にユーリは絶句する。

「……………一応確認しますけど、写本のほうでなく、オリジナル原本のほうですか？」

「残念ながら……」

困ったように微笑んだエリアーゼをユーリは真っ青になって見つめた。

一般的に魔導書は著者が直接書いた原本ではなく、原本を元にした写本の方を貸し出すのが一般的だ。

原本さえあれば、写本が持ち逃げされても何度でも書き直す事が出来るから。

しかし、この写本の作業の際、問題になるのは魔導書の材質や著者の比喩的な表現をそのまま再現する事は出来ない事。

活版印刷された文字や魔導陣、市販の紙では魔導書は魔力を持たず、一般人が書き写すとどうしても著者の比喩的な表現が理解できずに省かれたり、結果、原本とは微妙に違う魔導書になってしまう、という理由で写本の魔導書は魔導師達から不評だ。

しかし、ほとんどの図書館は写本の魔導書しか貸し出していないため、魔導師達は渋々写本の魔導書を借りているのが現状だ。

けれど、王立学院図書館は“紋”の魔導によって原本と写本どちらも借りることができる。

王立学院図書館が魔導師達の『溜まり場』になるほど人気な理由は

それである。

王立学院図書館の魔導階にあるのが写本された魔導書、その中でも魔導や魔導師を管理・監視する『元老院』が一般貸し出しを許可した魔導書のみが並んでいる。

一方、『一級魔導書』『一級危険魔導書』『禁制魔導書』階にある魔導書のほとんどが原本だ。

「そんなにたくさん……。まさか『学院』外に？」

「いいえ。魔導書の原本であるあの四冊は『学院』外に持ち出しできませんから、まだ全て『学院』内にあるはずです」

恐る恐る訊いたユーリにエリアーゼは安心させるように微笑みかける。

「あ、そっか」

ぽんっとユーリは手を打つ。

原本の魔導書は基本的に『学院』外に持ち出すことができなくなっている。

これは“紋”とは別の魔導であり、最高機密であるためにユーリも教えてもらっていない。

「“紋”の魔導が何故か働かなくなつて……。おそらく、何らかの魔導で目くらましをしているんでしょう」

“紋”の魔導を無効化？そんな魔導があるんですか？

「ええ、まあ」

言い辛そうに語尾を濁したエリアーゼを見、恐る恐る問う。

「まさか、「儀式」なんじゃあ」

「その可能性は高いです」

「そんな……！」

思わず蒼褪めたユーリをエリアーゼはそっとなだめる。

「まあ、ユーリさん。そんなに慌てず、落ち着いて」

「だって！！」「儀式」が行われていたら、『学院』が崩壊してしまうくらいの魔力が解放されるんでしょう！？」

「『学院』が崩壊なんて言いすぎです。そんなに大袈裟に考えなくても大丈夫ですよお？」

にっこり、ほんわかとエリアーゼ館長は微笑んでいる。

反射的に声を荒げかけたユーリは、その笑顔を見てぐっと言葉を飲み、そして疲れたように、肺が萎むほど大きく息を吐きだした。

おっとり優雅に微笑むエリアーゼを見て、一人だけ慌てて焦っている自分に気づく。

どれだけ焦っても、事の全容がよくわかっていない段階で一介の司書兼女子学生である自分にできることなんかないし、慌てても仕方がない。

それに、よくよく考えてみれば、王立学院図書館の責任者であるエリアーゼがこんなに落ち着いているのだ、事態はそれほど逼迫ひつぱくして
いないのだろう。

ほっと息をついて肩から力を抜いた。

「崩壊、は大袈裟です。せいぜい『学院』が半壊する程度で済みますから」

「全然フォローになってませんから！！」
爆弾発言に思わず叫んだ。

崩壊が半壊に変わったところで、『学院』への被害は変わらない。
平和を愛する、そして言いかえれば事なかれ主義である日本人だったユーリには刺激的すぎる話だ。

「まあ、落ち着いて。いまのところ魔導書が「儀式」に使われている気配はしないそうです。これは『禁制魔導書』方の証言ですから

信用できると思いますよ?」

ユーリがぐるりと『禁制魔導書』を見回す。すると、視線を受けた『禁制魔導書』が答える。

＜ああ、いまのところ我らは何も感じない＞

「じゃあ、どうして“紋”が無効に?」

「いまはわかりません。ですが、未返却の魔導書は回収をしないと
いけません……」

ぽんっとユーリの肩にエリアーゼの細い指が当たる。

ふんわりと良い香りのする白い手を見、にっこりと微笑んでいるエリアーゼを見上げる。

……………とても、嫌な予感がする。

「もしかして、その四冊をあたしに探し出せとか言うんじゃあ……」
背中に冷たい汗をかきながら、ユーリは乾いた笑みと共に問う。

エリアーゼは微笑む。

ユーリの肩をがっしりと掴んで……。

「……………あのく、エリアーゼ館長……。手を……」

ペンより重いものを持った事がなさそうなエリアーゼの華奢な手は
異常に強く、後退りして離れようともしない。

後退りすればするほどエリアーゼの笑顔が近づき、……………ぶっちゃけ
怖い。

「魔導書に詳しいクライヴ副館長とギズーノン司書はあの専門階の
修羅場でぶっ倒れていて使えません」

「ま、魔導階専門司書の方々は!？」

「彼らは通常業務に加えて貸し出し中の魔導書の確認に出払っています」

「か、館長！！あたしは学生なんですけど！？」

「だからこそ、『学院』内を自由にかつ違和感なしに歩きまわれるでしょう？」

「あ、歩きまわれても、魔導書を探せるわけが！！だ、第一！！」「儀式」が起こっていたら！！あたしは「儀式」を鎮めるような魔導を使えませんよ！！」

<そうだぞ。エリアーゼ>

<無理強いをさせるな>

<「儀式」の危険はお前が重々知っているはずだ>

普段はセクハラ発言しかない『禁制魔導書』達の援護にエリアーゼの手が緩まる。

美女に、にっこり笑顔の迫力に怯えていたユーリは解放されてほっと息をつく。

「本当は私が出向きたいのですが、大人の事情で私は大っぴらには動けません」

「大人の事情って……」

「知りたいですか？」

「……止めときます」

にっこり笑顔が怖いのです。

「本当はあなたにこんな事を頼みたくないのです」

顔を引き攣らせて後ずさったユーリを見て、エリアーゼも溜息をつく。

「私達が大っぴらに動けないのは大人の事情のせいですが、魔導書が未返却であるだけではチューリの自警団も<クラン>の断罪人^{ジャッジメント}も動いてはくれません」

「魔導書を使った「儀式」が働いている疑い、では動いてくれないんですか？」

「ええ、残念ながら」

ふうつと悩ましげに首を傾げたエリアーゼ。

しかし、その体から隠しきれない苛立ちのようなものを感じてユーリは身を固くした。

どうやら、エリアーゼはよっぽど「大人の事情」とやらに腹を立てているらしい。

『禁制魔導書』たちにく女狐>と呼ばれるほどに知略に長けているエリアーゼを怒らせる「大人の事情」とやらに興味がないわけではないが、おそらく知ったところで一介の学生であるユーリには何もできないだろう。

（未返却魔導書……）

未返却の魔導書が「儀式」に使われると確かに『学院』が吹っ飛ぶほどの災害が起きる。そうなれば、王立学院図書館で魔導書を保管・貸し出しすることが難しく……いや、できなくなるだろう。そうなたら……。

『禁制魔導書』達はどうなるのだろうか？

「……もし、「儀式」が起こっていたら、あたしは逃げますよ？」

「ユーリさん？」

<おい！！ユーリ！！>

「未返却の魔導書の回収に行きます」

<何を言っているんだ！！この愚か者！！>

<そうだ！！魔導が使えないくせに！！>

<莫迦者が……>

ぎゃいぎゃい騒ぐ『禁制魔導書』たちの声を聞きながら、ユーリはじつとエリアーゼを見つめる。

きよとんと目を丸くしたエリアーゼは、小さく、ユーリに聞こえないほど小さく呟く。

「それでこそ、【語り手】ですわあ」

ふっと口許にエリアーゼは不敵な笑みを浮かべる。

「これをどうぞ」

「これ？何ですか？」

どこからともなくエリアーゼがとりだした四角いものを反射的に受け取る。

四角いものは重厚な革と金で装飾されている本のようなのだ。

その四角の本の形をしたものは片手で包みこめるほど小さく、また、開いても文字が書かれたページがない。

背表紙の部分から伸びた鎖を見ると本の形をしたチャームが付いたペンダントのようだ。

「もし、これが使えたらこれは差し上げます」

<おい！！エリアーゼ！！>

<そんなモノに頼るくらいならば、我らを外に出せ！！>

<そうだ、そうだ！！我らが外に出れば魔導書くらいすぐに見つけられる！！>

「貴方方、前回『咎の隠し部屋』でうっかり二人殺しかけた事をもう忘れたのですか？」

呆れたようにエリアーゼは溜息を吐く。

前回、王立学院図書館に紛れ込んだ魔導書を巡る騒動で、『禁制魔導書』達は魔導師一人と司書一人を『咎の隠し部屋』に追い詰め、そこで魔力を暴走させてしまい、二人を殺しかけた挙句それに巻き込まれたユーリとアヴィリス魔導師を危険な目にあわせた。

それを知った以上、館長としてエリアーゼは『禁制魔導書』の自由な行動を許可できない。

そうエリアーゼは告げるが、『禁制魔導書』達は納得いかないのか、轟々と反発する。

そして、とうとうある『禁制魔導書』が禁断の言葉を口にする。

<この（自主規制）女！！>

その途端、『禁制魔導書』階に深海よりも深い沈黙と圧力が押し掛

かり、炎すら凍りつきそうな強烈な冷気が部屋中を支配する。
その圧力の根源からユーリは目を逸らして俯く。

いま、彼女を見てはいけない。

ユーリの視界の端で、エリアーゼが動く。

彼女は微笑む。

にこりと笑うその顔がもの凄く怖い。

「黙りなさい。燃やしますよ？ 18禁魔導書共」

この人なら、やりかねない。

エリアーゼが放つ恐怖に海千山千の『禁制魔導書』達も黙りこむ。

<す……すんませんでした……>

問題発言をした『禁制魔導書』がこそそと謝罪する声にエリアーゼは嘆息する。

「と、に、か、く、いろいろと問題のある『禁制魔導書』方を前回の件のようにこの階の外、ましてや図書館外に出すことは言語道断。『儀式』から身を守るためにも、この『書架』の使い方をユーリさんにはしっかり覚えてもらいます」

「はい!!」

ユーリは背筋を正し、そして、小さな本のような『書架』を見下ろす。

「けして無茶はしないで下さいね？ ユーリさん」

「はい」

「とりあえず、必要になるであろう資料はここにまとめてありますから、読んでください」

「あ、ありがとうございます」

エリアーゼが差し出したのはそっけない茶封筒。

開くと、中には数枚の書類。

どうやら未返却魔導書に関する事柄をまとめてあるらしい。

ついでに『書架』についての説明書も入っていた。

「無鉄砲な科学者の卵達の下に向かうといいでしょう。きっと魔導書の手掛かりが見つかります」

「え？」

にっこりと微笑んだエリアーゼの碧の瞳がユーリをじっと見下ろしていた。

「健闘を祈ります。ユーリさん」

謎の言葉と共にエリアーゼは去る。

残されたユーリは、ただその背を見送った。

8P 普段笑っている人が怒ると怖い（後書き）

魔導書がエリアーゼに言った（自主規制）ワードはおそらく年齢に関する事かと……。

9 P 魔導師と魔導書（前書き）

説明ばかりです。

すいません。

魔導書と魔導師の関係について……。

9P 魔導師と魔導書

「えー、1577年、いまから400年前ザラート王国はまだノックスハイム帝国のザラート領でしかなく……」

整然と机が並ぶ教室の中、セフィールド学院の制服を着た生徒達は教師の声に耳を傾けながら、ノートにペンを走らせる……。

のが、理想的な授業風景なのだろうが、抑揚のない低い教師の声は生徒達にとっては子守唄でしかなく、心地よい日の光を浴びる教室の中、ほとんどの生徒は机に突っ伏してまどろみの世界に旅立っていた。

その中にひとり、肺が萎れるほど深い溜め息をつく生徒がいる。

（ああ、マジで投げだしたい……）

セフィールド学院普通科の必修科目でありながら、もっとも退屈な教科である『建国史学』の授業をBGMにユーリは昨日手渡された資料をめくる。

読んでいくうちに、ユーリは憂鬱な気分になるのを抑えられない。

資料によると、ギズーノンやオリアナのような魔導階に慣れた司書ではない、魔導階に不慣れな司書達は少しでも効率を上げようと、カウンターに返却された魔導書をすぐに処理せずにある程度纏めてから処理しようと、カウンターに置いていたらしい。

その図書館に返って来ていたが、返却処理されていない魔導書を“誰か”が掠め取って行った。というのがたくさん未返却魔導書を出した理由らしい。

ユーリが探すよう任せられた未返却中の魔導書は四冊。

『マレフィキアの奇跡』、『星の神殿』、『惑星の影響』、『神秘

の手引き』

その中の二冊、『マレフィキアの奇跡』、『星の神殿』は『一級危険魔導書』

残り二冊、『惑星の影響』と『神秘の手引き』は『一級魔導書』。

『一級魔導書』級以上の魔導書が四冊も未返却。

しかも、その四冊の返却日も、借り主もバラバラだった。

『星の神殿』と『惑星の影響』を借りたのはショワナール魔導師。

彼は魔導書の返却に王立学院図書館に来ていた事を魔導階に入り浸っている魔導師達が証言した。

しかも、『学院』内にある魔導師専用の宿泊施設から退去しているうえに魔導書を所持していない事が確認済みだった。

『マレフィキアの奇跡』を借りた魔導師も数日前に『学院』外に出ていて、シロ。

（といっても、“紋”の魔導が上手く機能しなくなってから、魔導書が何冊か延滞されているみたいだけど……）

今朝、王立学院図書館司書が緊急収集され、図書館の保安業務や図書の取り立てを主に請け負う“保安司書”達による魔導書の強制回収が行われる事になった。

そして、今日以後一時的に原本の魔導書の貸し出しを禁止する事が決まった。

（今頃、『探求の館』は大変なことになってるんだろなあ……）

魔導科の校舎の側には魔導科に通う生徒用の寮があり、その魔導科の敷地内には遠方もしくは『学院』外から来た魔導師達専用の宿泊施設がある。

何故そんなモノが“学校”にあるのか？
答えは簡単。

原本の魔導書は『学院』外に持ち出しができないからだ。

昔、『学院』外から来る魔導師を受け入れる宿泊施設が『学院』内になかった頃、魔導師が『学院』内でこっそり野宿、『学院』内の空き部屋を不法占拠する事件が多発した。
事件を起こした魔導師達の言い分は、

『魔導書を読み終わる前に返さないといけないなんて嫌だ〜!!』

選ばれた存在であるはずの魔導師が子供のような駄々を捏ねるのは
いかなものか……。

それに困った（呆れたとも言う）『学院』関係者らが王立学院図書館利用者（主に魔導師達）に寄付金を募り、魔導科の寮に併設して『学院』外から来た魔導師のための宿泊施設を作った。
それが『探求の館』である。

『探求の館』が出来て以来、『学院』外から来た魔導師達も貴重な魔導書を無料で借りてじっくり読めるようになった。

しかし、それだけで、めでたしめでたし、とはいかない。

『原本の魔導書を借りる時は、己の力量を弁えてから借りましょう』
という無礼極まりない一文が魔導師用の図書カードに書かれている
ほど、魔導書の読解は難しい。
何故に、難解なのかと問われれば簡単だ。

一般人や無知な魔導師による魔導技術の乱用・悪用を防ぐためである。

著者にしかわからないような比喩表現や魔導師間で使われる隠語・暗号が多数使われ、そのうえ魔導書はとても分厚い。

あんまり能力のない魔導師だと魔導書の半分を読み解く前に貸出期間終了で強制的に返却を迫られる事もある。

貸し出し予約がされていない魔導書ならば貸し出し延長ができるが、貸し出し予約のされていない魔導書は滅多にない。

それに、『学院』外から来ている魔導師はどうしたって貸し出し延長はできない。

『学院』外の魔導師には『探求の館』に宿泊出来る期限というモノがある。

宿泊施設の宿泊期限が切れれば強制的に退去を迫られる。魔導書を返却しないといけなくなる。↓返却したら魔導書が返却されてくるのを、指を銜えてずうっと待たないといけない。

たま〜にだが、魔導科の空き教室に不法占拠する魔導師がいるらしい……。

故に、魔導師達は返却日ギリギリまで魔導書を手放さない。返却日の閉館時間まで粘りに粘って魔導書に齧りついている。

だのに、今回のように強制回収が行われるとどうなるか……。

（ぜったいたい、魔導師達は大人しく魔導書を回収させてくれるわけない……。きつと駄々を捏ねて、魔導書を手放したがない魔導師達と“保安司書”達の間でいざこざがおこってるだろうなあ）

しばらく、魔導科に、というか、『探求の館』に近づかない方がいい。

考えなくても司書はそんなことわかっている。
だが、

（でも、そうはいかないんだろうなあ）

ユーリが見下ろす資料。

それには髪をきつく縦ロールにして、貴族の娘らしいどこか傲慢な笑みを浮かべている少女の似顔絵が描かれている。

彼女は、セフィールド学院魔導科四年生、占術学部所属のアデラ・ヴィ・シンファーナ。

『学院』内に住む女子生徒。

そして、『神秘の手引き』の借り主。のはずの少女である。

唯一、原本の所持が可能である『学院』内にいる彼女は『神秘の手引き』をまだ持っている可能性は高い。

溢れ出てくる溜息をこらえられずにユーリは吐き出す。

手掛かりがない以上、唯一残っている可能性から潰していくしかない。

ユーリのどうしようもない心境を代弁するかのように、授業終了のチャイムが鳴り響いた。

9 P 魔導師と魔導書（後書き）

なんとやらずと馬鹿は紙一重。
事態は徐々に悪化中です。

ちなみに、『学研』まであと6日。

10P 科学の志

「だ・か・ら！！このとーり！！お願い！！『植物の化学』貸して！！」

「い・や・だ」

（う、ううう……）

厄介事を抱えている日に限って、どうして厄介事に出くわしたりするんだろう？

ユーリはぐったりした気分で彼らのやり取りを聞く。

ユーリの憂鬱な気分とは裏腹に澄んだ青空の下、綺麗に整えられた居心地のいい中庭。

そこで対峙する一組の少年少女。

一方は緑の表紙の本を大事そうに抱え持つ亜麻色の髪の少女、もう一方は少女よりちょっと背の高い首からゴーグルをかけた金髪の少年。

ひょんなことから昨日知り合ったばかりの少年と少女である。

『学研』まで一週間を切った今日から授業は午後まで。

ユーリはさっそく魔導科へ行こうと中庭の馬車停で馬車を待っていた。

魔導科はセフィールド学院敷地内でちょっと離れた場所にある。馬車を使わないと魔導科につくところにはとっぷり日が暮れているだろう。

そういうわけで、魔導科直通の馬車を待っているユーリの近くに言い争う少年少女がやってきて、いまに至る。

「あのー、お二人さん……」

いい加減言い争いに聞き飽きたユーリは敗北者の気分で彼らに声をかける。

第三者の声に二人はふっと正気に返り、驚いたかのようにユーリを同時に見た。

「あれ？昨日の……誰だっけ？」

「こんにちは、ユーリ」

かくんと首を傾げたイオンを一瞬睨んだのち、ミーシャは言う。

「や、昨日ぶり……」

「あ、昨日の司書か……げ」

「げ、とは何よ。げ、とは……。まあ、あんた達の痴話げんか聞いてたら、まあ、大体事情はわかるけど」

「痴話げんかって……」

渋面になったイオンを睨みつけ、言い放ったユーリの言葉にミーシャが顔を顰める。

「また図書をまた貸しさせてもらおうとしてるみたいだけど、何でそんなにまた貸ししてほしいの？昨日調べたけど、あんた、ミーシャの次に貸し出しできるよう申請してるじゃない。『科学の父の遺産』と『分子構造論』は大人しく待ってるのに……」

「それは……」

口ごもったイオンの代わりにミーシャが溜息交じりに口を開いた。

「魔導科が変な植物の開発をしたらしい。それを『学研』で発表するらしいから、それに対抗する植物を普通科の植物学部からも発表するために、『植物の化学』を貸して欲しい……だとさ」

呆れたような口調のミーシャをイオンが睨みつける。

「んだよ、その言い方！！俺はマジで植物学部のこと心配してるんだって！！」

「だからって、あと一週間もないのに植物がそう簡単に開発できるか！？科学者を目指すならもっと計画性と理論性を持って、根性論じ

「やあ科学を実証できない」

「何!？」

ぎゃいぎゃいと言い争いを始めた二人の間で、ユーリは頭を抱える。イオン少年の発言はかなりめちゃくちゃで、ツツコミどころ満載だ。「え……っ」と

とりあえず、いままでの彼の発言を纏めてみる。

「魔導で生み出した植物を、魔導科が『学研』で発表すると、ただでさえ科学系の学部の中で発言力が弱い植物学部が、科学科に加入できなくなるかもしれないから、なんとかしたい。だから『植物の化学』を貸して欲しい。」と

「おう」

「君、あたし達と同じ年だね? わかってる? あたし達が『学研』で発表できるのは来年だよ?」

「……わかってるよ」

「大方、発明した植物を植物学部の奴らに渡すつもりだったんだろ。先輩や教授の名前で発表してもらえば、手柄は植物学部の物だ」

「イオン君って植物学部志望の生徒じゃなかったよね?」

「科学学部……いや、総合科学学部志望らしい」

「らしい。じゃねーよ!! 総合科学学部に絶対入るんだ!!」

ミーシャの発言にイオンが声を荒げる。

「それじゃ、何で植物学部にこだわるの?」

「植物学部も『科学の父』が作った学部だからに決まってるだろ」さも当然だという風に言われた事にユーリは首を傾げる。

「どゆこと?」

「知らないの? 植物学部もいま科学科入り確實って言われている学部同様『科学の父』が作った学部なんだ」

「へえ、あ、なんか聞いたことあるような……ないような?」

「……科学を発展させ、新たな技術を生み出した『科学の父』に敬意を称して、『科学の父』が作った学部は全て科学科入りさせたいって考えている教授陣は多いって聞いてたけど……」

言いながらミーシャはちらつとイオンを見やる。

「生徒までそう思ってるやつがいるとは……」

どこかぐったりした顔のミーシャをイオンはムツと睨みつける。

「悪い事じゃねーだろ？ 科学科に学部全部そろえば、『科学の父』がバラバラに伝えた技術を共有できるようになる！！ 科学技術のさらなる発展には絶対必要な事だ！！」

「だから、『科学の父』が作った植物学部も科学科に入って欲しいのか」

「そう」

頷いたイオンにミーシャが溜息をつく。

「俺は『科学の父』直筆の『植物の化学』が読みたい。『科学の父』直筆の本にはすげーぶっ飛んだ技術の設計図とかも書いてあるからな。『植物の化学』にもきつと何か変わった植物に関する技術が載っているはず！！」

「それを『学研』で発表すれば、植物学部は科学科入りできる。」と「おう」

「その熱意は認めるが、それならますますお前に『植物の化学』を渡すわけにはいかないな」

「……何で？」

きょとんと目を丸くするイオンにミーシャはくつと口角をあげて皮肉げに笑った。

「お前が言う事を要約すると、植物学部のいまの研究内容では科学科入りさせてもらえないから、お前がこの『植物の化学』の研究内容を『学研』で発表したい。という事だな？」

「あ、ああ、まあ……」

どこか棘を含んだミーシャの言葉に、イオンは歯切れ悪く頷いた。

「いま植物学部で一生懸命研究している先生や先輩を馬鹿にしているのかっ！？ お前は何様だっ！？ 植物学部の科学科入りが無理だ、なんて誰が決めた！？」

ミーシャの怒声にユーリは首を縮める。

武人の父を持つにふさわしい迫力に息を飲んだ。

「なっ、別にそういうわけじゃあ……」

「じゃあ何なんだ！？お前が『科学の父』の技術をそっくりそのまま発表して『学研』で評価が得られると思っていたのか！？もしそうなら、お前は科学者にふさわしくない！！」

「んだとっ！？」

「ちよっと！！待って！！落ち着いて二人とも！！」

小柄なミーシャの首元をカツとなったイオンが掴む。

それを見下ろしたミーシャは何も言わずにイオンの手首を握って彼を睨みつける。

一触即発の空気に、慌ててユーリが割って入った。

「待って、落ち着いて。ここで科学科志望の生徒が乱闘なんかしたら、どうなると思ってるの？」

ミーシャとイオンの言い争いと不穏な空気に道行く生徒の視線が集まっている。

それに気付いたイオンが先に、バツの悪い顔をしてミーシャから手を離す。

「俺だって、『科学の父』の技術を丸パクしても意味ねえってわかってる」

「じゃあ、何故？」

「魔導に対抗できるのは、科学だろ？俺は一回だけだけど、『科学の父』の弟子っていう人が魔導の攻撃を防いだの、見た事ある……」

「……どんな科学技術だ？魔導を弾く科学技術なんか聞いたことないぞ？」

「でも、確かに俺は見たんだ！！何かよくわかんねーけど、何かの植物みたいなもんで魔導を封じてた『科学の父』の弟子の姿を……！」「ぎゃいぎゃいとまたも言い争いを始めたミーシャとイオンを前にユーリは溜息をつく。

「……何か、話がこんがらがってきた。イオン君は魔導科の生徒達が『学研』で発表するだろう植物に対抗する技術を発表したいわけ

だよね？」

「ああ」

「……できたら、その技術は植物学部の立場をあげるモノならいい
思っているんだよね？」

「ああ」

ユーリの再確認にイオンは頷く。

「……魔導科の奴らが、作ったあの植物、アレは在り得ない」

激しい嫌悪をにじませるイオンにミーシャとユーリは首を傾げる。

「さつきから気になってたけど、何でイオン君は魔導科の情報に詳しいの？」

「それは……」

喋りかけたイオンはハッと我に返ると「何でもない」と首を振る。

「で？まだ『植物の化学』をまた貸して欲しいと言うか？」

何となく不審なイオンの行動にユーリが首を傾げる一方で、ミーシャはキツとキツイ眼差しでイオンを睨む。

「参考までに話しておくが、ざっと見たところ魔導に対抗する植物
の存在も、それを作り出す技術も『植物の化学』には載っていない」

「そう……か」

「確かめてみるか？」

見るからに落胆した様子のイオンは疲れたように溜息をつく。

「いや。もういいよ。無理強いして悪かった」

じゃあな、と背を向けたイオンはどこかに去っていった。

「何だったんだ？あいつ」

「さあ？」

不機嫌な面持ちのミーシャの隣でユーリは首を傾げる。

「ところで、ユーリ。これからどこに行くんだ？」

「ん？ああ、司書の仕事で、魔導科に……」

ミーシャに問われたユーリはハッと顔を引き攣らせて、馬車停を見る。

魔導馬車が一台馬車停からいまにも発車しようとしていた。

「きゃーっ!! 待って!! 待って!! 乗ります!! 乗りまーす!!」

「あ、ユーリ……」

慌てて馬車に乗り込むユーリに置いて行かれたミーシャはぽつんと一人、馬車停に佇む。

「……行っちゃった……」

はあ、と溜息をついたミーシャは中庭の木陰で『植物の化学』を開いた。

ふと、ユーリが口走った行き先を思い出す。

「『学研』前のいま、普通科の生徒が魔導科の校舎に入って大丈夫なんだろうか……」

そういえば、何故魔導科に行くのか聞いていなかったと思いながら、ページをめくる。

その、ページの上に影が落ちる。

怪訝そうに顔をあげたミーシャは目の前の人物に目を丸くした。

「―先生？」

11P 戦う司書と魔導師達1 (前書き)

長くなったので分けます。

魔導書を探して魔導科に侵入。“紋”はどうしておかしくな
ってしまっただのか？

11P 戦う司書と魔導師達1

軽快な音をたてて、ユーリの乗った魔導馬車が進む。

柔らかい色をした青く澄みきった空に浮かぶおもちゃのような雲、色を濃くし始めた木々の小道を抜けるとほどほどに大きな川とその上に渡された橋、そしてその橋の奥には立派な門と鬱蒼と茂る木々に囲まれた城が見えた。

セフィールド学院の中でも選ばれた秀才・天才が住まい、未来の大魔導師の卵達が学ぶ場所。

『セフィールド学院魔導科校舎』

石造りの巨大な門を抜け、鬱蒼と茂る森の中の街道を走った先には、芸術性の高い優美な門、その奥に色とりどりの花々が完璧な調和を奏でる美しい庭、王侯貴族の屋敷に遜色しない美しさと雄大さを持つ校舎が聳え立つ。

「「相変わらずいつ見ても、学校のモノとは思えない」」

『セフィールド学院魔導科校舎』を見上げたユーリは、自分の声に被さった低い声に驚いて振り返る。

『セフィールド学院魔導科校舎前』と銘打たれた馬車停の看板の前にちよこんと停車した魔導馬車。その隣に、見知った顔を見つけてユーリは脱力した。

「……………何やってるの？アヴィリスさん」

無表情ながらもどこか嬉々とした様子で魔導馬車をいじくっている藍色の髪美貌の魔導師は、声を掛けられて初めてユーリの存在に気づいたらしい。

変化に乏しいながらもキョトンとした顔でユーリを見やった。

「ユーリ？何故ここにいる？」

「図書館司書の仕事。魔導書の回収に来たの。アヴィリスさんは？」
「俺はこれから少し図書館に行く」

いつもながらの無表情。

しかし、一瞬だけ、「厄介な奴に見つかった」とでも言うようにアヴィリスの顔が顰められた。

一方、それに気付かなかったユーリは呆れ顔でアヴィリスの首にかけられている<克蘭>の紋章を見つめる。本来ならば、彼はこの<克蘭>の紋章の他に着けていなければならない物がある。そう思いながら、ユーリは問う。

「……………前から思ってたんだけど。アヴィリスさん、王都で宫廷魔導師の仕事しないでいいの？」

「ああ、問題ない。俺の穴くらい適当に誰かが埋めるだろう」

「ふ〜ん」

ザラート王国の片田舎、チューリの学生であり、魔導の理解にはさじを投じているユーリは実際のところ宫廷魔導師の仕事をよく知らない。

（宫廷魔導師って意外と暇なのかな？）

ま、いいか、と魔導馬車を弄るアヴィリスから魔導科の方へ目を向けたユーリは、ふと、魔導科校舎門前の路地から走ってくる一人の女性に気づく。

「あ、オリアナさん…」

ユーリが気づいたようにオリアナもユーリに気づいたのか、オリアナの目が大きく見開かれ、声が飛んだ。

「ユーリ！！その男を捕まえなさい！！」

「は、はいっ！？」

条件反射。

司書見習いの頃、指導してくれた先輩司書の声を受けたユーリはアヴィリスの腕を握る。

「あ……」

いかにも、「しまった」という顔でユーリとこちらに向かって走ってくるオリアナを見たアヴィリス。その顔を見たユーリは何となく、状況を理解する。

「……すまん」

「は？」

突然の謝罪に、ぽけっと顔をあげたユーリの額に鋭い衝撃が走る。

「あだっ！？」

額の痛み思わず力が緩んだ途端、アヴィリスが魔導馬車に駆け込むのが見えた。

「しまっ！？」

その瞬間。

「ちえすとおおおおっ！！」

顔をあげたユーリの目に映ったのは、魔導馬車の幌を打ち破った大きなトランクと、馬車から弾き飛ばされて宙を舞う美貌の魔導師の哀れな姿だった。

トランクが飛んできた方角には、何かをブン投げた後のような姿勢

をしたオリアナの姿。

金属があげる若い女の悲鳴のような音と、大きな木が倒れ落ちるような音を背景に、ユーリは思う。

(……………来るんじゃない、なかった。魔導科)

「では、あなたが所持していた魔導書。『パラケススの書』、『赤き哲学書』、『黄金^{きん}の夜明け』計三冊、確かに回収させていただきました」

魔導書を詰めたトランクが軽い音を立てて閉じられる。それを恨めしそうに見たアヴィリスは不満げに呻く。

「納得、いかん」

アヴィリスの恨めしげな視線を受けてもオリアナはどこ吹く風。

「説明は何度もさせていただきました。それでもご不満でしたら、図書カードの登録を破棄させていただきます」

しれっとした顔で最終通告を下したオリアナに、アヴィリスは敗北して項垂れる。

顔が良いせいで漂う哀愁も当社比大だが、デコピンを喰らったユーリに同情する気は起こらない。

「オリアナさんも魔導書回収に出てたんだ」

「うん。保安司書だけじゃ人出足りないって。まったく、人使いが荒いんだから」

嘆息したオリアナは、基本魔導と専門階で働く司書。荒事に不向きなはずの、非戦闘要員……のはず、なのだが。

幌を突き破られた魔導馬車と宙を舞ったアヴィリスの哀れな姿を思い浮かべると、どうにも認識を改めざるを得ない。

ちょっと吊り目気味の目に薄い眼鏡をかけて、明るい茶髪をきゅつと纏めている、見るからに文学系女子な風貌なのに、……そのペンより重いものを持った事ありません、みたいな細腕のどこにある剛力があるのか……。

「ま、あたしはもうノルマの魔導書を回収し終えたから帰るけど。ユーリはこれから？」

「……はい」

しょんぼりと項垂れたユーリの肩をオリアナは慰めるように叩く。

「がんばれ」

「……はい」

げんなりした顔のユーリにオリアナは苦笑しながら、幌が壊れた魔導馬車に乗り込んだ。

「まだ保安司書と諦めの悪い魔導師数名が戦ってるから、気をつけなさいね？」

「はーい。オリアナさん、お疲れさまでした」

軽やかに進む魔導馬車を見送ったユーリは細く溜息をつく。

「ほら、いつまでうじうじしてるんですか？アヴィリスさん。一時回収が終わったらまた魔導書を貸し出してもらえるんだから。そんな、絶望した顔しないでよ」

「……お前にこの気持ち、わかるもんか」

「わかりませんよーだ。あたしは司書なんだから」

アヴィリスにデコピンを喰らった事を根に持つユーリはふんと鼻を鳴らす。

「そうかよ。ああ、そうだったな」

「……拗ねた子供みたいな言い方しないでよ。てゆーか、何でそんなに不貞腐れてるの？」

「不貞腐れたくもなる！！あと少しで魔導原理が解き明かせたのに

……っ！！」

「あゝ……。ご愁傷さま……………」

さも無念だと項垂れるアヴィリスにユーリは乾いた笑みを返す。
普段から無表情で冷静なアヴィリスのキャラが崩壊している。

魔導師にとって今回の魔導書の強制回収はよっぽどショックだったらしい。

（魔導科は、大荒れね）

「行きたく、ないな。魔導科……」

魔導科の建物は、元はこのあたりに住んでいた王侯貴族の屋敷を増改築して出来たものであるらしい。

そのうえ、魔導科に通う生徒のほとんどが貴族出身者である事を考えれば、彼らが住まう住居がどうなるか、そのくらい大体想像できるだろう。

「うわ。初めて魔導科に来たけど、すごいなあ」

一応、学生寮という事でシンプルな外装だが、それでも郊外の貴族の屋敷と遜色しないほど美しくて立派な屋敷である。

そして、前庭には未来の魔導師達が住まうにふさわしい工夫が凝らしてあった。

色とりどりに咲く花はもちろんの事、水が色々な形に変わる噴水や形を変えるトピアリー……、普通科に通い、魔導にあまり触れあう事のないユーリには全てが物珍しい。

「あれ、いまの時期咲かないような花だね？」

「ああ、温度調節のための魔導機がそこに入っているからな。王都の貴族も何人か使っている」

「わ。噴水の水の形が猫に変わった」

「ああ、あれも魔導機だ。王城にもたしかひとつあったが、ここで作られたものらしいな」

「うわゝ、すごいねえ」

おのぼりさんよろしく目を輝かせていたユーリだが、その感嘆の声が徐々に力を無くしていく。

最後には顔を引き攣らせたうえに言葉がかなり棒読みだ。

「ああ、だからこそ、残念な光景だな。コレは」

アヴィリスの視線の先、ユーリがあえて見ないようにしていた先には、芝生の上や点在する東屋で暗黒を背負い、項垂れてしくしく泣いている魔導師の卵達がいた…………。

「…………」

彼らのそばには必ず二人一組の王立学院図書館司書がいる。

「うっ、うっ、ううっ」

「えーと、『コルカサスの書』、こっちは『六芒星原理』、『魔導薬学書』」

「酷い、…ぐすっ、ひ、ひどい。あんまりだ…………」

ユーリと同じく王立学院図書館司書のネームプレートをつけた司書達が魔導科の生徒から無情に魔導書を回収していく。

「はいはい。さっさと魔導書を返してください。一時的な回収措置ですから、また優先して貸し出しますよ」

「オニーっ!! アクマーッ!!」

こちらの司書は、何らかの魔導機でがつり縛られた学生から魔導書を引っ張り出している。

「…………地獄だな」

魔導科寮前の光景をアヴィリスはそう評価する。

「そんな、魔導書の一時回収くらいで大袈裟な…………」

「そちらの都合で一方的に魔導書を奪い取って行くこの行為が酷くないと？」

ギロツと見下ろされたユーリは乾いた笑みを浮かべる。

魔導書を無理やり奪い取られたアヴィリスも気持ちは彼らと同じらしい。

「ま、まあまあ、アヴィリスさんがされた事は、……まあ、特殊？大人しく魔導書を一時回収させてもらえたら、こちらは……」

—— ドツ……ッゴオオオオオンッ

ユーリの声は魔導科寮の隣、美しい深紅の薔薇が茂る生け垣の向こうから響いた轟音で掻き消された。

「『探求の館』の方からだな」

「……」

アヴィリスが見つめる先、『探求の館』がある方から声が聞こえてくる。

「くそうっ！！せっかくの魔導書を返してたまるかああっ！！」

「だから！！一時的なものですから！！回収中はこちらに宿泊できるように、配慮をっ！！」

「あと20ページで読み解けるんだ！！返せるかああああっ」

「魔導書を返してくださいーい！！」

『探求の館』で抗争中の魔導師と司書もいるらしく、『探求の館』から轟音が聞こえる。

「阿鼻叫喚とはこのことだろうな」

「……何で魔導師達はあそこまで抵抗するんだか……」

ぽつりと呟いたユーリはハッとアヴィリスの方を見上げる。

表情に乏しく基本的に物事に無関心なアヴィリスだが魔導に対しては別人のように情熱的で探求心にあふれている。

そんな彼にうつかり魔導師の魔導書への探求心を問うような事を言えはどうなるか……。

以前、『禁制魔導書』階に連れて行って欲しいとしつこく頼んできたときに、何故そこまでして『禁制魔導書』階に行きたいのかうつかり聞いてしまった事がある。

その時は、二時間くらい『禁制魔導書』について講釈され、『禁制魔導書』が魔導師にとってどれだけ価値があるのか説かれた。

「ヴァルプルギス・ナハト魔導技術研究学会が近いからだろうな」

「ヴァルプルギス？」

延々と魔導書についての演説及び講習をされるかと身構えたユーリはあまりにあっさりした答えに拍子抜けする。

「知らないのか？王都で開かれる魔導技術の発表会があるんだ。今年の最優秀者はきゅう」

今年の最優秀者がどうなるのか、聞くことはできなかった。

……ドオオ……オンツ　——……ガッシャーンツ

「ゴラアアアッ！！貸し出し中の魔導書を返せーっ！！」

「ぎゃああああっ!？」

鶏が絞められたような悲鳴と共に魔導科寮の前庭に突如として轟音が突き刺さった。

12P戦う司書と魔導師達2

計算尽くされた調和の下、美しく整えられた庭の一部にもうもうと土煙が立ち上がる。

土煙が視界を塞ぐ中、不完全に発散された魔力の残滓がパリパリと弾けて火花を飛ばす。

（魔導の不完全爆発？）

アヴィリスは一瞬で爆発原因を割り出し、身構える。

「な、何だ？」

「ごほっ、くしゅっ!!」

土煙が視界をふさぎ、庭にいた人々が煙にむせる中、爆心地にひとつの人影がむっくりと立ち上がる。

何かを引きずるような鈍い音と規則的な足音と共に人影がこちらに近づいてきた。

「っ!!」

腕に覚えのある魔導師や魔導科生徒、司書達が身構え、人影を警戒する。

刹那、一陣の風がふわりと煙を裂く。

「ろ、ロラン……さん……」

土煙の中から出て来たのは、いぶし銀のような色合いの髪と目を持つしなやかな体躯の男。

「ん？ユーリか？」

ユーリの顔馴染みの司書が、図書館で見た事のある男の人の顔面をがっちり片手で掴んでぶら提げていた。

もう一方の手には重厚な装飾がされた本。魔導書がある。

「魔導書の回収ですか？」

「ああ」

いつもと同じ口調で飄々とした態度を崩さないロランに司書達は皆脱力する。

「いいんですか？こんな、乱暴に……」

ユーリの視線の先には、木っ端微塵になった『探求の館』の窓と大きなクレーターが開いた魔導科寮の前庭。

何をどうしてこうなったのか、さっぱりわからない。

だが、ロランに片手でがっちり顔面を握られながらピクリとも動かない魔導師と無傷でピンピンしているロランを見るとさすがに魔導師が哀れになってくる。

「ユーリ。それはコレ見てから言え」

眉を顰め、その体躯にふさわしい厳しい顔をしたロランが苦々しげに吐き捨てる。

ロランが回収した魔導書の見返しを開いてこちらに掲げられた。

見返しに記された、知を司る女神をモチーフにした“紋”。その一部が歪に歪んでいる。

わずかな“紋”のブレだが、そこからパチパチと帯電するように魔力が発光していた。

それを見たユーリはぎょっと目を見張る。

「“紋”を剥がそうとしたんですか!？」

「ああ、こいつの持つてる魔導書の“紋”の魔導に異変があったから、最優先で回収して来いって館長からのお達しでなっ!前にも

こいつは“紋”剥がそうとした前科持ちだから!! 踏み込んでみたら、思った通りだ!!」

「いだだだだっ!! いだっ!! すみません!! すみません!! もうしませんっ!!」

「っざけんな!! 前は未遂だったから見逃したが、今回はもう見逃せねえ!! エリアーゼ館長の所に一緒に来てもらう!!」

魔導師の顔面をロランの指がみしみしと鈍い音を立てて締め上げていく。

ロランの手の中でびくんびくんと釣りあげられた魚のように^{けいれん}痙攣する魔導師を魔導師の卵達は蒼褪めた顔で注目する。

「ユーリ、奴は何者だ? 修繕専門の司書じゃなかったのか?」

とうとう動かなくなり、息絶えた(ようにみえる)魔導師とその原因となった司書を交互に見やりながら、アヴィリスは問う。

ロランという司書には王立学院図書館で何度か会った事がある。間違はなく司書としての仕事をしているはずの彼は何故、あそこまで荒事に慣れているのか?

「ううん。ロランさんは基本的に図書館の保安と図書の保護を行っている、“保安司書”なの。でも、ロランさんは手先が器用だし、ベテラン司書だから、大量に破損図書が出たときとか、手が空いてる時はいろんな業務を手伝ってくれるの」

「……」
なるほど、とアヴィリスは頷く。

王立学院図書館は広い。

その中で犯罪行為が起ころぬよう取り締まり、図書を盗み出したりされないよう守るのが“保安司書”の役割。

荒事に慣れているように見えたのは彼の職務内容によるものらしい。一応、納得したアヴィリスは、ふと、『探求の館』から癖っ毛の男が息を切らしながら走ってくるのに気付いた。

「……あれは」

見覚えがある顔にアヴィリスは目を細める。

「あ、ネロさん」

以前、『始まりの叡智』のページをすっかり読み上げて修繕室を大破させてしまった司書である。

「遅いぞ。ネロ！！どこで何してたんだ？」

走ってきたネロはオリアナが持っていたのと同じトランクを足元に置き、荒い息をしたままロランを睨みつける。

「ロランさんが『探求の館』に穴開けたせいで何故か！！俺が管理人達に怒られてたんですよ！？っというか、窓に穴開けて隣りの庭に突っ込んで何でそんなピンピンしてんですかッ！？」

「慣れた。慣れ」

「有り得ないっ！！」

涼しげな顔で、しれっと言ひ捨てたロランに、くわっとネロは噛みつく。おそらく、この場にいる全員がそう思っただろう。

「うるせーな。大体、その窓ぶち抜いたのも、ここの庭に穴開けたのもこいつのせいだぞ？」

ぶらん と力を失っている魔導師の体を揺らしてロランは不満そうに唇を尖らせた。

「……………魔導攻撃された癖に、何でそんなにピンピンしてるんですか!?!」

「気合いだ」

「嘘つけええっ!?!」

なおもキャンキャンと喚くネロを五月蠅そうに見下ろしたロランは「アレ出せ」と片手を差し出す。

ネロはむすうっとした顔でトランクから『魔封じの棘』を取り出した。

赤い毛糸玉のようなそれを見た途端、アヴィリスが嫌そうに顔を顰める。

迷子のなった魔導書の事件で『魔封じの棘』に拘束された記憶は彼にとって不名誉なものらしい。

「アホ!! 殺す気か!! それじゃなくて、拘束用の魔導機があっただろう」

「あ? コレですか? 『白枷』」

「それだ」

「ちょっと待て」

司書二人のやり取りを聞いていたアヴィリスが突然声をかけた。

自分たちの行動に「待った」を掛けられたロランはいささか不満げに顔を顰めて彼を見下ろす。

「何だ?」

「『魔封じの棘』に拘束されると、死ぬ事があるのか?」

「魔力吸い尽くされると、さすがの魔導師も死ぬだろ?」

きょとんとした顔で、さも当然のようにロランが言う。

意外な事を訊かれたという顔をするロランの隣でネロがうんうんと

頷く。

「『魔封じの棘』の魔力吸収量に耐えられた魔導師って聞いたことないですね」

「魔力吸い尽くされて死にかけた魔導師は聞いたことあるけどな」

さらっと言われた危険発言にアヴィリスは顔を引き攣らせる。

ルキアルレス達と戦ったあの夜、自分はそうとは知らずに殺人兵器をポイポイ投げつけられていたのだ。

おそらく、あのまま『棘』に囚われていたら自分は魔力を吸い尽くされ、木乃伊になって死んでいたのだろう。

（危なかった……ッ!!）

ドキドキと不規則な鼓動を繰り返す心臓に手を当てながらアヴィリスは冷や汗をかく。

「縛れ『白枷』」

ロランの声に反応して白い色の鎖が無情に魔導師に絡みつく。

「ネロ、お前はそのままこいつを館長の所に連れてけ。俺はリストの魔導書を回収する」

「了解……。あとで『探求の館』の管理人達に謝っといってくださいよ？ 本当に激怒してたんだから」

「気が向いたらな」

ネロからトランクを受け取った担いだロランは豪快に笑いながら魔導科寮の中に入って行く。

（普通の司書が魔導の不完全爆発の中から出て来て、どうしてピンピンしているんだ？）

背中に寒い物が走るのを感じながらアヴィリスは首を傾げる。

彼らの話から予想すると、いまネロに引っ立てられていく魔導師は借りている魔導書を死守すべく、回収に来たロランに魔導攻撃を喰らわせようとしたのだろう。

その魔導攻撃をロランは詠唱を止める事で防いだようだが、何かの拍子に不完全に成功してしまった魔導が爆発、庭に投げ出されたらしい。

普通の人間なら、あんな風にピンピン動き回れたりしない。

魔導の波動を帯びた魔力は一般人に恐ろしく有害だ。

王立学院図書館は魔導師からしても不思議な場所だが、そこで働く人間もビックリ人間なのだろうか？

ワンダーランド

「……………王立学院図書館司書は化け物なのか？」

「あの人は特殊です！！」

一緒にすんな！！とその場にいた司書全員が叫んだ。

13P 迷走序曲

貴族の子息・息女が多数在籍する魔導科寮は基本的にひとりにつき一室部屋が与えられ、噂によるととても豪華らしい。

それを裏付けるように、魔導科寮の部屋の扉はとても立派なオーク材で出来ている。

そんな扉の前に佇んだユーリはぼつりと呟く。

「えーと。資料によると、ここがアデラ・ヴィ・シンファーナの部屋……」

魔導科寮のとある生徒の自室の前に立ったユーリは、可愛らしい花々をあしらったノッカーを一応叩く。

（出るわけないよね……）

無言の返事にユーリは溜息をついた。

（さて、どうしたもんか……）

とりあえず、何か手掛かりでもないもんか、と行き当たりばったり気味にここに来たものの、部屋の主はいないらしい。

（まあ、部屋に本人がいても、大人しく魔導書を返して貰えるとは思ってないけど……）

とりあえず。

「何でついてくるのかな？アヴィリスさん」

後ろを振り返ると、風景の一部と同化したようにゆったりと佇む美貌の魔導師の姿がそこに在る。

「魔導書を回収されて暇なんだ。お前の側にいると面白い事があって退屈しない」

「じゃあ、ロランさんの所に行けば？いま、もの凄く退屈しないと思うよ？」

くいつと指差した天井がちょうどいいタイミングで揺れた。

くぐもった悲鳴とロランのモノと思しき怒声、何か重いものが壊れる破壊音が響く。

パラパラと埃をまき散らしながら、きいきいと危なっかしい音を立てて天井のシャンデリアが揺れる。

「さすがに俺も命は惜しい」

「あ、そー」

いけしゃあしゃあと吐き捨てられた言葉にユーリは胡乱な目を向ける。

だが、まあ、気持ちはわからんでもない。魔導を繰り出して抵抗したであろう魔導師相手に魔導を防ぐ防具もなく、無傷でピンピンしていたロランの姿はまるで達の悪い冗談のような光景だっただろう。そんな不毛なやり取りをした二人の間を一陣の風が走り抜けていく。

「……」

風の行方を追った二人は二つの人間の背中を見た。

「コラッっ！！待ちなさい！！魔導書を返しなさい！！」

「うるせーっ！！いやだあああああっ！！」

という声を残して行った事から魔導科の生徒と司書なのだとわかる。廊下の向こうに消えていく背中を見送ったユーリとアヴィリスは顔を見合わせる。

「しかし、“紋”の魔導の不具合点検。という割には随分派手な強制回収だな。他の魔導師達が不審がっていたぞ」

「“紋”の魔導の不具合点検だから、強制回収してるの！！うっかり魔導書を借りパクされたら大変なんだから！！」

「だが、魔導書を外には持ち出せないだろう？」

「…………？」

ユーリはふっとアヴィリスの言葉に違和感を覚える。

“紋”の魔導に不具合が起こっても確かに魔導書は外に持ち出せない。

魔導書を『学院』内に閉じ込める魔導と“紋”の魔導は別物だから。

（でも、それは……）

「ユーリ！！」

「っ！？……アリナ？」

呼び声に振り返ったユーリは豪華な金髪を波打たせながらこちらに走ってくる少女を見た。

心なしか、少女の青い瞳に畏怖と恐怖、そして驚きが垣間見えたのは目の錯覚だろうか？

「どしたの？ アリナ」

「それはこっちのセリフですわ！！ どうしてユーリがアヴィリス・ツヴァイル・ネルーロウ・スフォルツィア氏と一緒にいるのですかっ！？」

荒い息のまま、一気に言葉を吐きだしたアリナの大きく見開かれた目と迫力に負けてユーリは一步後ずさる。

「どうしてって……」

話題の的になったアヴィリスをちらっと見やる。

当の本人は「我関せず」といった様子で天井から落ちて来た埃を暢気に払っている。

（むしろ、あたしが訊きたいんだけど……）

うんざりした顔でアヴィリスを見、アリナに向き直る。

実は、こういう手合いに出会うのは初めてではない。

迷子の魔導書事件、あるいは王立学院図書館放火事件の後、すっかり王立学院図書館の常連になった宮廷魔導師のアヴィリスが一介の司書であり『学院』の学生であるユーリと仲良く（他の人から見るとそう見えるらしい）しているのを訝しみ、よくユーリに『何故アヴィリス魔導師と仲良くしているのか！？』と詰問してくる事が（特に女性から）あったのだ。

そういった手合いに、よくわからない現状も、いままでの経緯も逐一説明するのはとおっても面倒臭い。

アリナは友達とはいえ、アヴィリスとのよくわからない関係を説明するのは面倒なので、今回もテンプレを使わせてもらおう。

「……なりゆき？」

「なりゆきって……、こういったなりゆきで宮廷魔導師が『学院』の魔導科寮で司書と一緒にいる状況になるんですの？」

呆れたように溜息をついたアリナに、ユーリは小声で耳打ちする。

「いや、前にアヴィリスさ……アヴィリス魔導師が図書館に来た時に、彼図書館が気に入ったらしくって、近頃常連の一人になったんだけど、今回の魔導書強制回収の件が気になるからって付いて来たの」

「……………そうなの？」

「そーなの」

重々しく頷いたユーリにアリナは胡散臭げな視線を向ける。

それを振り払うように、そして、これ以上アヴィリスが話題に上がるのを避けるように、ユーリは話題の変更を試みる。

「ところで、どうしたの？アリナ。血相変えて、何があったの？」

「何があったの？っていままさに異常な事が起こっている最中でしよう！？」

「？」

「あの司書達は何ですの！？卑しくもセフィールド学院の魔導科生徒の魔導攻撃を受けていながら、どうしてあんなにピンピンしますの！？」

ユーリに詰め寄ったアリナは、いつもの貴族らしい落ち着きを失くした様子で、どこかパニック状態だった。

おそらく、ロランのハチャメチャぶりをうっかり目撃してしまったのだろう。

魔導に対して絶対の信頼と自信を持つ魔導科生徒にとって、あの光景は軽くトラウマになるものだろう。

「アリナ。落ち着いて、あの人は司書の中でも特殊だから、魔導書さえ大人しく渡したら酷い事はされないから」

ユーリがそう言うのが終わるか、終わらないかの瀬戸際でまた、爆音が響き渡る。

断末魔の咆哮のような爆音の余韻を聞きながら、蒼褪めた顔でこちらを見つめる魔導科生徒達の視線を受けたユーリは……。

「あは……………」

笑って、誤魔化すことにした。
が、

「ユーリ……」

アリナが向ける視線が痛い。

だが、こっちだって引くわけにいかない。

魔導書一冊紛失するだけで、王立学院図書館の存続に関わってくる。それくらい、魔導書は高価で希少なもの。だから、司書達は何としてもノルマの魔導書を回収しなければならない。

「いや、いやいやいや!! ロランさんは悪くないよっ!?!? よおしく考えてみて? 魔導書の整備・点検しようっていう司書に、何でもこの生徒達はあるなポンポン魔導攻撃仕掛けるかなっ!?!?」

言い訳がましく口から出て来た言葉だったが、口に出してみてもと気付いた。

学生の身分で王立学院図書館司書に盾突いて、『学院』生活が無事におくれるなど考える奴は魔導科にはいない。

日々の課題提出、卒業の論文作り、全てに図書館と図書館を網羅する司書の助けは必要になる。

そんな彼らが図書館司書に強気に出る時。

それは、よっぽど切羽詰まっているか、司書達に後ろ暗いところがあつて強がっているか、それとも……。

(強力な後ろ盾がいる?……)

その事に気づいたユーリはふっとアリナを見つめる。

「ねえ、アリナ。魔導科寮での魔導の行使は禁止事項のはずなのに、あんなにポンポン魔導を使つて誰も何も言わないの?」

「……え? それは……」

ユーリの問いにアリナは不思議そうに首を傾げた。

「あら? 言われてみれば、どうして寮長も管理人も何も言わないのかしら?」

指摘されて初めて気づいたらしいアリナに、ユーリは少し考え込むように騒がしい上の階を見上げた。

基本的に魔導科寮は上の階に行くほど上級生の部屋になる。いま、ユーリ達がいるのは魔導科四年生の階。

魔導書を死守する生徒の魔導による抵抗は上の階になるほど酷くなっている気がする。

「アリナは、魔導書を大人しく司書に渡したんだよね？」

「え、ええ。もちろん」

「じゃあ、何であんなに上級生たちが魔導書を手放したがないのか、わかんないかな？」

「『学研』が近いからじゃないかしら？」
「？」

「魔導科では、学部が決まって、初めて『学研』に参加する三年生は学部内で何人かのグループに分かれて研究と発表をして、四年生は三人以下の少人数のグループ、もしくは個人で、五年生以上になると学部で立ち上がったテーマに基づいて各個人での研究を発表する。という形式になっていますの」

「でも、そのあたりはあんまり普通科とも変わらないよね？芸術科も騎士科も医学科もしてるし……」

学年が上がり、志願し、学部内の教授に認められれば個人での研究を発表することが可能になる。

魔導科だけが特別、というわけではない。

ユーリが首を傾げるとアヴィリスが口を開く。

「学年が上がるごとに研究内容に個人色が強くなり、直接本人の評価につながるというわけだな？」

「はい。そうですわ」

「？」

なるほど、と頷いたアヴィリスに対してユーリは何のことなのかさっぱりわからない。

見かねたアヴィリスが面倒臭そうに口を開く。

「魔導師が魔導師として認定されるには、“アルス”以上の階位を持つ魔導師の下で数年の修行と師となった魔導師の了承と魔導師認

定試験に合格する事が必須になる」

「はあ」

「この学生達は基礎的な魔導を学んだ後、各学部教授の下で各々の特性に合った魔導の指導を受け、卒業と同時に魔導認定試験を受けるんだろう？」

こくりとアリナが頷く。

「あ」

ようやくユーリにも何の事だか読めて来た。

「当然、魔導科の生徒の卒業、魔導師認定試験の受験資格取得にもこの『学研』の成果が影響されるんだろうな」

「はい」

「なるほど。だから学年が上の人達はあるなに必死で魔導書を死守しようとしているんだ」

ぽんつと手を打ったユーリは次いでさあつと青褪めた。

「……………司書達^{あたし}って、いま、相当ヒドイコトしてる？」

「……………さっきからそう言っているじゃありませんか」

魔導書回収が魔導科生徒の人生を左右するなんて思いもよらないじやあないですか！！

そう言いたい気持ちだが、ユーリはその言葉をゴックンする。

「魔導科の先生も寮長も管理人も司書への魔導攻撃を黙認するわけだな」

得心がいったようなアヴィリスの言葉に覆いかぶさるように階上で大規模な爆音が響く。

魔導科寮を揺らす衝撃に任せて、そのままユーリは頭を抱えて蹲りたくなった。

14P 迷走間奏曲

「はあ」

ユーリは重々しい溜め息を落とす。

衝撃の新事実が発覚したもの……。

（魔導書は回収しないといけないんだよねえ）

気が進まないし、魔導科の生徒達からは殺気立った視線を感じるが、司書としての職務は果たさないとはいけない。

皆、魔導書に記された“紋”をまるで魔導書を王立学院図書館に縛り付けるための“枷”のように思っているようだが、それは“紋”の作用の側面にしか過ぎない。

魔導書に“紋”が記される理由のために司書達は必至で魔導書を回収しているのだ。

「『特に、『一級魔導書』以上の魔導書の回収は早急に』」

エリアーゼの言葉を反芻したユーリは溜息と共に回収ノルマの魔導書リストを取り出す。

と、シヨルダーバックから一緒に突っ込んでいた一枚の資料がひらりと落ちる。

「あ」

ユーリが身がかがめて拾い上げようとするより先に、節張った大きな手がそれを拾い上げる。

「アデラ・ヴィ・シンファーナ？」

アヴィリスが資料の一番上に記された名を読みあげる。

「ああっ、返して!!」

アヴィリスが拾い上げた資料にはどこか挑発的な笑みを浮かべた女生徒の絵姿が小さく描かれていた。

「こいつがお前のターゲットか？」

「ターゲットって……あたしは暗殺者ですか？」

「似たモノだろう？」

くいつと天井を指差したアヴィリスの人差し指の上から、地響きのような振動と埃が落ちてくる。

「……」

無表情のアヴィリスの視線を受けたユーリは何とも言えない顔でアヴィリスの指した天井を見上げて溜息をつく。

魔導書回収は熾烈を極めているらしい。

「とりあえず、返して」

仏頂面でユーリが広げた手の上にアヴィリスは肩をすくめて拾い上げた資料を返す。

「それにしても、王立学院図書館は随分と太っ腹だな」

「？」

魔導科寮の廊下を歩くユーリの背後でアヴィリスがぽつりと呟く。

「『一級魔導書』は王都の王立魔導図書館では魔導師認定試験に受かった“魔導師”しか借りられない。……だというのに、ここの学生は申請さえ通れば『一級魔導書』も『危険魔導書』も借りられると聞く」

ブツブツと呟くアヴィリスの声音に隠しきれない羨望と妬みを感じ取ったユーリは歩みを止めて彼を見上げる。

歩みを止めて不思議そうな顔でこちらを見上げてくる少女に気づいたのか、アヴィリスがふとにやりと、不敵に唇を釣り上げる。

「魔導師まがいの学生風情には過ぎたモノだと思わないか？」

「何が言いたいのか？」

アヴィリスの言葉に表情にどこか馬鹿にするような、嫌味な色を感じたユーリは眉をひそめる。

「いや？ただ、その学生が『一級魔導書』をどの程度読み解けるのか、疑問に思っただけだ」

「……」

どうやらアヴィリスはあの一瞬で資料に書かれた、アデラ・ヴィ・シンファアーナの借りた図書の履歴を読んだらしい。

アデラ・ヴィ・シンファアーナが借りていた図書は学生らしい選択だった。

ここでネックになるのが、けして『魔導科の学生らしい』選択ではないということだ。

人が読んだ本を集めて積み上げれば、その人の職業や性格、歩んできた人生がわかる。

そう言ったのは誰だったか。

昨夜、エリアーゼから受け取った資料を読みたがった『禁制魔導書』達も、資料を呼んだ後に断言した。

<この娘は『一級魔導書』を手にしたところで読み解けなどしない>

そして、その上でユーリに問うた。

<手に余る事がわかっているであろう魔導書を、この小娘は何故手にしたのかのう？ユーリ>

「アヴィリスさんも、アデラさんが『一級魔導書』を読めないと思うんだね」

「……………そこまで断言はしないが、まあ、読めなさそうだと思うったのは確かだ」

「……………そうですか」

がっくりと肩を落として力なく呟くユーリにアヴィリスは不審そうに眉を跳ねあげた。

「読めない魔導書を持っても使う事は出来ないだろう？」

「じゃあ、何で読めない魔導書を貸出期間過ぎても返してくれないわけ？ アデラさんは」

ジロツとユーリがアヴィリスを上目遣いで睨むという器用な行動をしてみせた。

「……………ああ、なるほど」

ユーリの視線の先でアヴィリスが納得したように頷く。

魔導書を借りたのがアデラ・ヴィ・シンファーナだとしても、現在魔導書を保持しているのがアデラ・ヴィ・シンファーナである保証はない。

ユーリは溜息をついて歩き出す。

「魔導科に、行くのか？」

アヴィリスが気怠げに見上げた窓の先には古い小城がある。

黒く見えるほど濃い色を纏う林の中で悠然と佇む、魔導を学ぶ者たちの本拠地。

『世界の真理』に挑む“無謀者”の巣窟。常識の通用しない異世界の中心がそこにある。

「いいのか？ あのアリナとかいう娘がいうには、普通科のしかも司書のお前がいま魔導科の校舎に入るのは危険らしいぞ？」

「……………せつかく覚悟決めたっていうのに、出鼻くじいて決心鈍らせるようなこと言わないでくれないかな」

ユーリはげんなりした顔で肩を落とす。

アデラ・ヴィ・シンファーナの行き先について心当たりはないか、

ユーリはアリナに訊いた。

『占術学部 of 四年生。アデラ・ヴィ・シンファーナ？』

あまり上級生徒は交流がないのか、アリナはこてんと首を傾げ、眉根を寄せて考え出した。

『確かな事は言えませんが、占術学部では何か、大がかりな魔導の実験をしているそうで、生徒もその準備に借り出されているとか…』

『大がかりな、魔導………』

ユーリの脳裏に『禁制魔導書』階で『禁制魔導書』達が科学科の技術の台頭で占術学部の立場が危ういというような事を話していた事を思い出す。

(やな予感………)

じわっと背中に冷たい汗が滴り落ちる感覚にユーリは身を震わせる。

『ええ、ですから、おそらく占術学部の使用している実験棟に行けば会えるとは思いますが……』

ふと、アリナが難しい顔で言いづらそうに言葉を濁した事に気づく。

『アリナ？』

『………これは根も葉もない噂話なのですが………』

わずかに視線を逸らし気味にアリナらしくない気弱な口ぶりで彼女は言う。

『今回の魔導書回収は、魔導科が『学研』に失敗するよう科学科に加入したい普通科学部の者たちが起こした陰謀だという話が出回っていて、普通科の生徒が魔導科校舎に近づいたら、迎撃しようという一派がいるようで………』

『………迎撃って………一般人に対する魔導攻撃は禁止されてるでしょ？』

『………禁忌を犯しかねない空気をひしひしと感じます』

『………わお』

アリナの切実な表情にユーリは顔を引き攣らせる。

しかし、よくよく考えてみると、『探求の館』の魔導師も魔導科寮の生徒達も一般人のはずの司書達にばんばん魔導攻撃を仕掛けている。

魔導という非常識を起こす事を生業とする魔導師。それを目標にしている学生にも常識は通用しないらしい。

深く溜息をついたユーリは、諦めた様に小さく呟いた。

その時、呟いた言葉と同じ言葉をいまアヴィリスの前で口にする。

「でも、行かないといけないんだよねえ」

とっても嫌です。と声高に訴えかけるような背中を見せつけながら、ユーリは歩みを進める。

アヴィリスはその自分よりはるかに小さな細い背中を見つめていた。怜悯な美貌はいつものごとく無表情で、何の感情も見受けられず、ただ冷え冷えと凍えるような鋭さだけが浮かび、傍目にはユーリを冷たく睨んでいるようにも見えた。

しかし、彼の鋭く切れるような形をした太古の時代の記憶を内包した宝石のような瞳だけは何か迷うようにゆらりと揺らめいた。

「…………行くなら俺も行こう」

「だから、何で付いてくるの？」

迷惑です。という気持ちを感じしもしない表情と声でユーリは唸る。

「この学生がどれほどの研究をしているのか興味がある。それに、俺がお前の側にいるのはお前にとって悪い事ではないはずだ」

しれっと応えたアヴィリスは一枚の紙切れを懷から出し、指先から離すと同時に指を鳴らす。

それと同時に魔導陣が描かれた紙切れは消え、代わりに軍服を模した仰々しい宮廷魔導師の制服……の上衣が現れる。

「宮廷魔導師に向かって魔導攻撃が出来る根性のある学生。その面を拝めるなら拝んでみたい」

手早く上衣を纏ったアヴィリスにユーリはきょとんと目を丸くする。
「そりゃあ、攻撃されなくなるならありがたいけど……」

ユーリの手首で心細そうに小さな音を立てたのは、王立学院図書館の紋章と魔導文字や記号が彫り込まれた王立学院図書館司書の証である腕輪。

司書達が持っている、魔導攻撃に対する防具。（ロランは持ってなかった）

もちろん、これも完璧ではない。

ロランが喰らっていたような攻撃を受ければ粉々に砕けてしまう。

「お前には『始まりの叡智』の件で借りがある。それに……」

「それに？」

意味深に言葉を切ったアヴィリスはにやりと唇を釣り上げた。

「お前にうっかり死なれては『禁制魔導書』階に行けなくなる」

「……………あたしがうっかり死にかけたらあんたも道連れにしてやる！！」

くわっと噛みついたユーリの前をアヴィリスは晴々と笑う。

「それでこそ王立学院図書館司書だ」

15P 迷走間奏曲？（前書き）

お待ちせしました。
魔導科潜入です！！

15P 迷走間奏曲？

セフィールド学術院の中で最も特徴的で有名な学科といえば、誰もが口を揃えて「魔導科」だと言うだろう。

そして、セフィールド学術院の「魔導科」に在籍する学生達は狭き門を潜り抜け数々の試験を乗り越えて来た優秀者達^{エリート}。

そんな彼らが住まい、学ぶ場所。そして、魔導と言う一步間違えれば万人を傷つけてしまう危険な学問を学ぶ場所である魔導科校舎は古城のように豪華でまた、堅牢だった。

昔は領海権を守るために駐屯していた海軍の砦だった歴史を持つ魔導科校舎は中央の大きな塔を中心にいくつかの塔が建っている、城。しかし、歴史ある城は、今日はいつもととは違った喧騒に包まれていた。

「本当か!？」

「ああ、この目で見た」

「うそっ!?! どこっ!?!」

「ほら、見て!! あれあれっ!!」

バタバタとせわしなく生徒達が走り、各々が見下ろす先、魔導科の城の中、塔と塔との間には立派な渡り廊下と美しい庭園が広がる、中庭。

その中庭を歩く一組の男女がいた。

一人はセフィールド学術院の制服を身に纏い、王立学院図書館の司書の証であるネームプレートと腕輪をつけ、王立学院図書館の紋章が書かれたシヨルダーバッグを肩から提げて歩く小柄な少女。

もう一人は深い藍色を基調にした詰襟の上衣を纏った、伶俐な美貌を持つすらりと背の高い、野生の豹のように優美で気品のある青年。魔導科の生徒達はまず、彼のその美貌に見惚れてほうっと息を吐き、

彼が纏う上衣を見てハッと息を飲んだ。

「青の宮廷魔導師……！！」

「アヴィリス・ツヴァイル・ネルーロウ・スフォルツィア………っ！
」

「どうして、彼がここに？」

ざわざわと騒ぐ魔導科の生徒達の注目の的は、宮廷魔導師である彼の方らしい。

その彼はこの『学院』の生徒らしい司書の数歩後ろをのんびりと歩きながらあたりを見回し、何事か呟いたり、じっと塔の尖塔を眺めたりしている。

「どこへ行くんだ？」

「おい、お前訊いてこいよ」

「ええっ！？嫌だよ」

「うちの学部に来るかな！？」

「いや、来るなら絶対うちの学部だ！！」

やいやい言い争う生徒をよそに、緑の絨毯のような芝生の上を歩く少女と青年はとことこと迷いなく魔導科の奥へ奥へと進んでいく。

「あれは……」

彼らが入っていった塔。

その塔で主に研究されている学問を知る生徒達は一様に首を傾げた。

「どうして、彼がああ塔に？」

「ここが占術学部の教育・実験塔。か」

ようやく目当ての塔に辿り着いたユーリは溜息をついて項垂れた。魔導科の校舎の正門から一番遠い場所に在るのが、占術学部に所属する学生が占術やそれに準ずる魔導について学び、研究する塔。魔導科の校舎案内図から見た時は、他の学部から離れて突っ立っている塔だな。という印象しかなかったが、実際占術学部の塔に行っ

てみると違った。

他の学部 of 校舎からも遠く離れて、小さな木立の中にぽつんと突っ立っていたのがこの塔だ。

危険な魔導実験をするわけでもない学部の実験塔がどうしてこんなに他の学部の塔と離されているのか？

（なんか、占術学部の魔導科での立場が反映されてるっぽい……）
女の悲鳴のような音を立てて開く、重い扉を開けたユーリは他の学部と占術学部の違いに愕然とする。古めかしい調度品や内装が多いのは他の学部も一緒だが、占術学部とは違い、他の学部は古くても洗練され、品がある印象だったが、占術学部はただ古くて野暮ったい感じがする。

「あまり人気のある学部ではないようだな」

アヴィリスがぼつりと呟く。

彼もユーリと同じ事を思ったようだ。

「それに、あまり大した研究もしていないらしい」

「何でわかるの？」

「他の学部に比べて魔導に対する結界や防壁が薄いし、古ぼけている。……日常的に魔導を使う施設ではありえないくらいに、な」

アヴィリスが言いながら、懷から鳥の形をした銀細工を出し、閉じた扉に向かって放つ。

銀細工の鳥はアヴィリスの手から離れた瞬間、小さな銀の鳥に変わり扉に向かって飛ぶ。鳥は扉に当たる瞬間にパシッと静電気がはじけるような音を立てて発光した。が、何の抵抗もなく扉は小さな鳥のために開き、鳥は外に出た。

「もし、こんな所で……」

魔導的な大騒ぎがあったらどうなるのか？

訊こうとしたユーリの声は甲高い声に遮られた。

「まああっ！！アヴィリス・ツヴァイル・ネルーロウ・スフォルツイア様！！」

思わず耳をふさいで俯くほどの超高音・音量に、さすがのアヴィリスも顔を顰める。

「…だれ……」

目を開けたユーリは床に付きそうなほど長い薄紫色のヴェールの裾を見た。

「あ」

体をすっぽりと覆う、金の縁取りがされた紫のヴェールそれを見た瞬間、超音波のような声の主が誰であるのかわかった。

「お久しぶりでございます。アヴィリス魔導師。王都からこちらに來られているとは露知らず、お出迎えもせずに申し訳ありません」顔を覆うヴェールが不自然な動きで肌蹴て、その下にあった顔が露わになる。

きつく波打たせた赤みの強い金髪に猫のように釣り上がった濃い茶色の瞳、一部の隙もないほど頑強に施された化粧のおかげで華やかに顔立ちは整ってはいるが、値踏みするように動き回る目のせいか、魅力的とは言い難い。

「誰だ？」

胡散臭げな顔でヴェールを纏う人物を見ながら、アヴィリスはユーリに問う。

「あ、セフィー……」

「モイラ・セロスⅡノルン・ヴィ・ヴォルヴァですわ。アヴィリス様」

ユーリの声を遮り、ほとんど強引ともいえる仕草でヴォルヴァ助教授はアヴィリスに詰め寄る。

「何者だ？」

「ここで生徒達に占術を教えています。恐れ多い事ながら、助教授として」

「……………」

（何故、そこであたしを見るんですか？アヴィリスさんや）
しかも、そんな疑わしそうな目で。

「…………セフィールド学院魔導科の占術学部ヴォルヴァ先生ですよ」

（ほとんど授業持つてなくて、靈感商法やってるようなダメ先生だけど……）

心底疑わしそうな、深い知性を内包する琥珀色の瞳からユーリはそっと目を逸らす。

その素直なユーリの行動から全て察したのか、アヴィリスは実に面倒臭げに己の前で身を摺り寄せてくるヴォルヴァ助教授もといヴォルヴァ先生を見下ろす。

「ところで、普通科生徒がどうしてここにいるのかしら？」

ユーリとアヴィリスの無言のやり取りをしているうちに、ようやくヴォルヴァ先生はユーリの存在に気づいたのか、不機嫌そうにユーリの胸元のエンブレムを睨みつける。

「……………仕事です」

ユーリが司書の証であるネームプレートや腕輪、王立学院図書館の紋章が記されたショルダーバッグを指差す。それを見たヴォルヴァ先生の顔が嫌悪に顰められる。

「司書ごときがこの神聖な学び舎に何の用かしら？」

「…………魔導科に通達を行っているはずです。いま、魔導書を保持するのは危険です。早急に魔導書を図書館に返してください」

静かに宣告したユーリにヴォルヴァ先生は馬鹿にするように鼻を鳴らし、呆れたように肩をすくめて見せた。

「神聖かつ高尚、選ばれた人間のみに学ぶことを許された魔導に危険はつきもの」

ですが、と声を切ったヴォルヴァ先生は傲慢な笑みを顔に浮かべてユーリを見下ろした。

「魔導を学ぶことを許された私達^{わたくし}には危険を退ける叡智と力があるわ。司書ごときの心配など無用です」

「……………」

「この学び舎で王立図書館の魔導書を借りている生徒から魔導書を

取り上げるとは許しません。わかったならさっさとここから立ち去りなさい」

あんまりな言い草にさすがのユーリもカチンと来た。

「なっ！！何を言ってるんですか！？あの魔導書達は貴方達が自分で作ったものじゃないんですよっ！？あれはっ！！」

「神聖な学び舎で五月蠅い声で喚かないで頂戴。私達の繊細かつ高貴な心眼の妨げになります」

出来の悪い生徒を窘めるように、しかし、煩わしそうに耳をふさいでヴォルヴァ先生は言う。

じろりとユーリを責めるように見下ろす目にはやはり隠しきれない侮蔑の色がある。

「だからっ！！」

声を荒げかけたユーリの肩をポンツと掴んでなだめる手があった。ふつと顔をあげたユーリの視線の先には思わず見惚れるほど美しく、しかし、触れることを躊躇うほどに冷たく凍えるような無表情な顔があった。

「ならば、俺もここから立ち去るとしよう」

「……………え？」

ぽかんと間の抜けた声を出したのはユーリだったか、ヴォルヴァ先生だったか。

アヴィリスは目を丸くして自分を見つめる二つの目を平然と見下ろす。

「俺はアデラ・ヴィ・シンファーナというこの生徒が借りている魔導書を読みたい。だが、返却期間を過ぎてもなおその生徒が魔導書を持っているらしい、それをこの司書が回収すると聞いて付いてきた。だが、この司書が魔導書を回収できないなら仕方がない。…帰るとしよう」

「待ってくださいましっ！！」

そう言ってくるりと背を向けたアヴィリスに縋りつくようにヴォルヴァ先生は手を伸ばす。

「そんな事を言わずに、どうか、我が神聖なる学び舎を見て下さい。そう、そうですわ！！今度行われる『学研』用の特別な魔導をお見せします！！ですから、どうか……」

「しかし、俺の借りたい魔導書が手に入らないなら、別にここに用はないのだが？」

冷然と見下ろすアヴィリスに気圧されたか、ヴォルヴァ先生は一瞬口籠る。

「魔導書は……」

しばし考え込むように目を伏せたヴォルヴァ先生はしばらく逡巡した後、にこりと微笑んだ。

「『学研』の実験をご覧下さいまし。きっと彼女の持つ魔導書より深い叡智を貴方に授けるはずですわ」

さあ、さあとアヴィリスの腕を取って強引なまでに校舎内を進むヴォルヴァ先生の意識からユーリは消え去っている。

突然の展開にまったく付いていけないユーリはただ呆然とするばかりだ。

「あのう……」

嵐の後に残り残されたガラクタのように廊下のだ真ん中に取り残されたユーリは、どんどん離れて行くアヴィリスとヴォルヴァ先生の背中を見つめる。

と、ヴォルヴァ先生に引き摺られるように歩くアヴィリスが一瞬こちらを向いて、付いて来いとでもいう様に顎をしゃくった。

その偉そうな行動に、ユーリはムツと顔を顰める。

だが、彼らに付いていけばアデラ・ヴィ・シンファーナの持つ魔導書『神秘の手引き』が見つかるかもしれない。

（魔導書……、『学研』用の実験……）

嫌な符号にユーリはごくりと喉を鳴らす。

しかし、意を決したようにぐっと息を飲むと、廊下の向こうに消えて行くこうとするアヴィリスとヴォルヴァ先生を追いかけた。

その小さな背中をばたばたと軽い羽音が追いかける。

アヴィリスが外に投げた銀の小鳥がいつの間にもやがて校舎の中に戻ってきて、ユーリを追いかけていた。

アヴィリス達を追いかけることに夢中のユーリはその事に気づかない。

銀の小鳥はユーリの肩にさりげなく止まる。

不思議な事に、忙しなく動くユーリの肩に乗っているはずなのに、銀の小鳥はユーリの肩から生えているかのようにピクリとも動かない。

「……………何事も、起こってなければいいんだけど」

ユーリの呟きを肩に吸いつくように止まった銀の小鳥だけが聞いた。

16P 迷走間奏曲？

「これから行う魔導は、古の叡智の再現であり、古くより続く魔導の歴史に名を残す名誉ある魔導である」

通りの良い、だがどこか神経質な声が薄暗い部屋に朗々と響く。

その部屋は、大きな石を積み上げて作ったような、見るからに頑丈そうな部屋で、広い割には薄暗く、古く、まるで冬の曇り空のような寒々しい部屋。

その灰色の部屋の、学校の教室の教壇のように一段高くなった場所で、壮年ぐらいの男が朗々と小難しい熱弁をふるっている。

それを聞くのは男と同じデザインの茶色のローブを纏うたくさんの人影。

部屋を覆い尽くさんばかりに集まった、ローブを纏う人影は熱弁をふるうその男の前、部屋のちょうど中心にある何かをぐるりと囲むように集まっている。

ローブからのぞく彼らの顔立ちは若く、幼さを残しており、ローブに縫い込まれた『学院』のエンブレムから察するに魔導科の生徒らしい。

彼らが囲む、部屋の中心に在るのは、魔導陣。

様々な色合いの鉱石を砕いて作っただけ、色鮮やかな絵具で描かれた魔導陣は、灰色の空の下で咲いた極色彩の花のように、とても美しく、華やかで、一個の芸術品のようだ。

しかし、その中心に何とも地味なものがぽつりと置かれている。

まるで花の中にぽつりと開いた虫食いのようなソレは、本。

四角い、何の変哲もない革表紙に包まれた、見るからに古臭い本。しかし、彼らの目は一心にその本にこそ向けられている。

「さあ、これより我らは叡智の開放を行う！！」

その声と共に、ローブを纏う彼らから朗々とした魔導の詠唱が始ま

る。

声に呼応するように、魔導陣がゆらりと小さな光を灯す。
導火線を走る炎のように魔導陣を小さな光が走り、強く、強く、光りはじめる。

その光に揺り起こされるかのように、魔導書がカタコトと震えた。
それを見た彼らはより声を高くして、叫ぶように詠唱を続ける。

ふわり

魔導陣から出る光の絨毯の上を魔導書がまるで羽が生えたかのように浮かび上がる。

ぱらぱらとまるで見えない読み手が魔導書をめくっているかのように魔導書のページが踊り、踊るページから吐き出されるように、魔導書から文字が浮かび上がる。

極色彩の彩りで浮かび上がる文字は美しく、まるで、天井の花弁が舞うようで、魔導の詠唱を続ける彼らがほうっと感嘆の溜息をつく。うっとり、酔う様に彼らは詠唱を続ける。

その声に応えるように魔導書の文字が踊り上がり……

光が部屋を覆い尽くす。

その、一瞬。

ぱきりと何かが外れるような音がした。

「うぶっ!？」

いきなり巨大な壁にぶつかって、ユーリはくぐもった悲鳴をあげた。
驚いて顔をあげると、夜明けの空のように鮮やかな深い藍色が視界を染めていた。

次いで感じたのは人間らしい温もりといままでユーリが嗅いだ事の

ない不思議な香り、そして自分が手をついている藍色の柔らかな感触。

顔をあげた先にあったのは、何の表情も浮かんでいない凍えるような美貌と太古の記憶を内包した琥珀のような色合いの瞳。

「アヴィリスさん？」

「……………」

突然立ち止まったまま身動き一つとらないアヴィリスは、何かが気になるのか、あたりをぐるりと見回して、難しい顔をしている。

「どうかなさいましたか？」

怪訝な顔でヴォルヴァ先生も振り返る。

「……………結果が、震えた」

ぽつりと呟くと同時に、ぎろりとヴォルヴァ先生を見下ろす。

「おい。魔導の実験を行っているのはどこだ!？」

「え？それは……………」

いきなりアヴィリスに詰め寄られたヴォルヴァ先生はぎょっと身をすくめる。

「さっさと案内しろ!!」

「はっ、はいっ!!」

アヴィリスの恫喝に怯えたヴォルヴァ先生は脇目を振らずに走りだした。

その後を追おうとしたユーリの肩を大きな手が掴んで止める。

振り返るといつになく渋い顔をしたアヴィリスがユーリを見下ろしていた。

「お前は来るな。ユーリ」

「え？何でっ!？あたしは魔導書を回収しないといけないんだよ!？
ついて行くよ!!」

「危ないかもしれんぞ？」

「危ない……………」

（間に合わなかったかもってこと?）

何らかの異常事態が起こっているかもしれないらしい。

（でも）

しかし、そう言われてもここまで来た以上、そうやすやすと引き下がれない。

もはや癖のように、ユーリは『書架』を握りしめる。

「……………あたしが、毎月必ず行方不明者が出るような危ない図書館に住んでるって事をお忘れですか？」

キツとアヴィリスを見上げた目が絶対に逃げないぞと言っている。

「……………いや」

力なく首を振ったアヴィリスは小さく息を吐くと、

「自分の身は自分で守れよ？」

「善処します」

こくんと頷いたユーリにアヴィリスはくすりと小さく笑う。

「行くぞ」

ユーリとアヴィリスがヴォルヴァ先生に案内されて辿り着いたのは、塔の地下だった。

薄暗い部屋の奥、鉾が打たれた黒い大きな扉。

まるで、冥界に通じる扉のように、重厚で排他的な闇そのものを濃縮したようなソレにユーリは知らず身を震わせる。

ユーリは気づいていないが、アヴィリスは扉に魔導が仕掛けられていることに一瞬で気づいた。

（選別、あとは封じと保護の魔導がかけられている…。結構強いな）昔は力のある魔導師が占術学部にもいたらしい。

この地下に入ってから、王立学院図書館にはかなり劣るものの魔力や魔導を抑制する力を感じる。

（この扉の魔導もかなり強い。封印の魔導式が流動している？誰だ？こんな魔導見たこと無いぞ？）

ここに来て初めてアヴィリスの目に小さな光が灯る。

その光はまるで生まれて初めて贈り物もらった子供のように無邪

気でどこが残酷な色をしていた。

「ここが、我ら占術学部が誇る大実験室名付けて『神秘の間』ですわ」

まるで自分がこの部屋を作り上げたかのように堂々と胸を張るヴォルヴァ先生をよそにアヴィリスはユーリの肩をそつと突つつく。

「……………そう呼ばれているのか？」

「いや、あたしに訊かれても…、あたし普通科の生徒だし」

「酷いネーミングセンスだ」

「……………」

ユーリもそう思っていたが、アヴィリスの言葉に頷くことはせずに賢明なる沈黙を守った。

何しろこそそ話しているように見えてこの二人の会話は普通の音量で行われていたのだ。

つまり、ヴォルヴァ先生にも筒抜けというわけで……………。

すっかりアヴィリスの言葉を聞いていたヴォルヴァ先生は顔をぴくぴくと引き攣らせながら、せめてものの威厳を守るために大きく咳払いをして懷から鍵を取り出した。

「これは…」

「『鍵』の魔導か」

ヴォルヴァ先生が何か言いかける前にアヴィリスが珍しく感心したようにほぅっと息をついた。

「『鍵』？」

「封印・結界系の魔導の一種で、『鍵』と『錠』で一組の魔導だ。

その名の通り『鍵』は『錠』を開けるため・閉めるためにあり、『錠』はけて何人たりとも『錠』の中に入れない・出さない。『鍵』が『錠』を開けない限り」

「へえ」

「……………その通りでございますわ。アヴィリス様。さすが宮廷魔導師さ」

「早く開けろ」

ヴォルヴァ先生の言葉をばつさり切り捨てて、アヴィリスは顎をしゃくって扉を指す。

ヴォルヴァ先生は何か言いたそうだったが、渋々アヴィリスに従って扉を開く。

かちり

小さな金属音の後、闇そのもののような扉が地響きを立ててゆつくりと開く。

その瞬間、ぱさりと何か、とても聞き馴染みのある音をユーリは聞いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4107u/>

未返却魔導書と科学のススメ

2011年12月19日22時18分発行